
School Story

桜実保乃佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

School Story

【Nコード】

N6017Q

【作者名】

桜実保乃佳

【あらすじ】

高校生2年生になったときのお話

蘭は新一とただ一緒にいただけのコトが原因で、ある人に目をつけられてしまう…

不登校になってしまった蘭、新一は蘭の心の鎖をちぎることが出来るか…

新蘭です

Story 01

「お父さん、ご飯出来てるからちゃんと食べてよ!!じゃあ、行っ
てきます!」

ある1人の女子学生が気分よく家を出て行った

なぜかというと…

今日から新学期、女子学生、毛利蘭は帝丹高校に通う高校2年
クラス替えというのもあり、いつもより少し家を出て早くクラス表
が出ないかと期待を胸に抱いていた

ふと空を見ると快晴、そしてひらりと綺麗に舞う桜の花びら

手を広げるとバランスよく1片の桜の花びらが蘭の手の平に落ちた

風になびく髪

2

新学期という感じを醸し出している

そして蘭がいったん止まって目の前には大きな洋館

インターホンを押すと今度は眠たそうに欠伸を1つし、少しこげた
パンを口にくわえ、髪がぼさぼさの男子学生がいた、

名は工藤新一、蘭と幼馴染で今、高校生探偵が大活躍、日本の警察
の救世主として雑誌等で取り上げられている男子学生だ

「もう!新一ったらまだご飯食べ終わってないの?早く食べないと
遅刻って言うかクラス表、はり出されちゃうよ!

新学期くらいちゃんとしてよ!!」

蘭は新一を叱るようだったが、新一は懲りてなく

「へいへい……、てか蘭は新学期、新学期って浮かれすぎなんだよ。まだ1時間早いぜ……。」

門が開くのは8:00、今は7:00……!」

新一は自分がつけている腕時計の文字盤を蘭に見せた
蘭は苦笑

携帯電話を取り出してしっかりと時刻を確認した
確かに今は 7:02 と表示されている

「まあ、待たせるのもなんだし1回入れよ。」

新一は門を閉めながら、いい、蘭は洋館内へと入っていった

「ゴメン、1時間間違えちゃった…。でも珍しいね、新一っていつも起きるの7:30くらいじゃなかったっけ？」

蘭は台所で野菜を作りながら新一に聞いた

新一は

「勝手に目が覚めた…。」

とそっけなく答える

「嘘おっしやい、本当は新学期楽しみでしようがないくせに！ちやうんと顔に書いてあるわよ！！」

「う・うっせーな！」

新一は少し頬を赤くしながら珈琲を一口飲んだ
蘭は野菜炒めを持ってきて新一はそれを食べる

そうしている間に校門が開く時間に近づき2人はスクールバッグを持って、家を出た

「着いた！！クラス表クラス表」

蘭は真つ先にクラス表が張っているところへ向かった
新一も後を追う

しかし、人がうじゃうじゃいて、新一は途中で蘭を見失ってしまった

蘭は迷うことなくクラス表前までたどり着き、自分のクラスに書いてある自分の名前を探し当てた

2 - B

勿論、新一の分も…

2 - B

「新一ー！新一ー！私と新一、一緒だよ！！」

蘭は心から喜び、辺りを見回し、新一を見つけクラス表前まで引張っていった

新一はただ「ふーん、そうか。」というだけだった
しかし内心は喜んでいるに違いないと考えるのが普通だろう

新一と蘭が2 - Bの教室に入る

「蘭、おっはよー!!」

元気に蘭に向かって挨拶したのは鈴木園子、鈴木財閥の娘で超がつくほどのお金持ちのお嬢様

しかし、お金持ちの生活におぼれることなく小さいころから蘭とは大親友で一緒に遊んでいた

新一にとっては悪友

「園子！！同じクラスだったんだねー！私、凄く嬉しいよ！！」

蘭と園子は手に手を取り合って状態

新一はその様子を呆れてみているが口元は少し笑っていた

そこへ勢いよく教室の扉が開き、蘭より美人といえば美人で蘭より髪が長い女子高生が入ってきた
しかも何人かの女子生徒を率いて

執事かと皆、思うが確かにそのとおりでもあったりする

女子生徒は鈴木財閥には及ばないが、権力を持つ家庭のうちの1人、
如月里香きげのりか

学校に寄付をしている内の1人

性格は園子と違い「真逆で、自分より権力の低い人は貶すことがしばしばあった

しかも裏では新一の大ファンで

高校生探偵工藤新一LOVE というファンクラブを作っていた

勿論、会員ナンバーは1番

会員は全校でも3分の1以上だったりする

しかし、里香は自分の思い通りにならないと気がすまない人だったため、何が何でも自分中心でないと駄目だった

新一と同じクラスにしてくれと頼んでも学校の都合上では断られたりする、カンカンに怒った里香は父親に怒りをぶつけ、父親は学校に怒鳴り込みに来た

そのせいで何人かの教師がやめていった

「工藤新一様と同じクラスになれたわ！しかも出席順で隣同士なんて…、なんて運がいいのかしら…。」

浮かれている里香、それと同時にチャイムが鳴り、皆、自分の席に着席した

里香はウキウキワクワクドキドキの繰り返しで何も、一言もしゃべってなかった

いや、喋れなかった、新一が机に伏せて寝ているから

起こすコトも出来るが、会員としても新一の寝顔はとても美味しいところ

無理にして起こすとせっかく美味しいところが見れなくなるどころか、返って新一の機嫌を損ねるかもしれないと思ったためでもあった

そのとき勢いよく教室の扉が開き、1人の女教師が入ってきた

「皆さん、お早うございます。私は今年2-Bの担任になった美和みわ由貴ゆきです。教科担当は数学ですので皆さんと接する機会が多いと思います。」

新米ですが宜しくお願いします。」

担任が挨拶をすると拍手が沸き起こる

そして入学式が終わり教室に戻ると今度は学級委員長、副委員長、各専門委員を決めることになった

最初に学級委員長、男1名、副委員長、女1名となり、後は議長、女1名、副議長、男1名、書記男女1名ずつを決めることに

「はい、ではこの中で委員長になりたい人、または推薦者はいますか？」

担任が聞くと園子が机から立ち上がり

「先生、委員長は工藤君、副委員長は蘭がいいと思います！！皆はどう？」

と笑顔で新一と蘭を推薦した

蘭と新一は微妙に赤面し始めた

「いいな、工藤と毛利なら夫婦だし、2人の愛をよりいっそう高められるしな……」

1人の男子生徒が言い出すと他の生徒は皆一斉に賛成の声を上げた
しかし1人だけ賛成しない人がいた

如月里香

「工藤君と並ぶなんて許せないわ！少し懲らしめてやらなくては
けませんわね。」

里香は不敵な笑みを浮かべていた

Story 01 (後書き)

何かあれば作者まで！

感想・評価等待着つてます

ではでは

平成23年2/2 桜実保乃佳

Story 02 (前書き)

毎日投稿目指して頑張ります！(出来ない可能性のほうが近いですが…)

Story 02

新学期から早いもので大体1週間がたった

新一と蘭は相変わらずでクラスメイトから「夫婦」やら「アツアツ恋人」などとからかいを受けている

新一と蘭はその度に2人同時に赤面をし、「そんなんじゃない」と否定

まあ、しかし心内は2人とも気持ちは同じでただ素直に自分の気持ちを伝えられないだけ

素直になればきつと恋人同士なんて簡単になれる
その度にクラスメイトは笑いあう

新一と蘭もそれにつられ笑いあっていた
しかしクラスメイトの大半以上が新一と蘭のひやかしに参加しているものの興味が無いもの、そして新一と蘭の仲を認めようとするものがない

決まって如月里香…

里香は休み時間になれば新一の元へ来る蘭を妬んでいた

「せっかく新一様とお隣の席になれたというのにあの毛利蘭という女のせいで私と新一様との関係はいつも崩れていますわ！

早く作戦を練らなくてはいけませんわね。」

里香は休み時間になるといつもこういう独り言を言っていた
そのためクラス内ではいつも1人だった

入学式の日にはいた2人の友達はクラス編成の際、クラスがばらばら
だったため教室での友達は誰1人いなかった

「里香ちゃん」

蘭が里香の元へやってきた
満面の笑みだ

里香はそんな蘭を数秒見つめるとフイとそっぽをむいた
蘭は一瞬驚いたが

「ねえ、里香ちゃんの趣味って何？読書？あ、イキナリ話しかけら
れてびっくりさせちゃったね。

私の名前は毛利蘭、宜しくね、里香ちゃん！」

と明るく話しかけなおす

里香は更に嫌気が差したのか

「私の前に近寄らないで下さる？汚らわしいですわ。」

と握手しようとした蘭の手を強く叩いた
クラス全体がその行動に目を丸くして驚いた

蘭は顔を顰めて叩かれたところを抑える

里香はその顔を待っていたといわんばかりの笑みを浮かべ、席を立
った

蘭は相当強く叩かれたのか、涙を流しそうになっていた

まあ、確かにざわついていたクラスの中でも響いた音なのだから結
構強く叩かれていたのだろう

蘭の叩かれたところは真っ赤に腫れていた

園子は蘭の元へすぐに駆け寄る

「蘭、大丈夫!？」

抑えている蘭の腕をみると園子は目を丸くした

新一も蘭の元へと駆け寄ってきた

園子同様、蘭の腕を見て驚いたが、自分の持っているハンカチを水
でぬらし、蘭の腫れている部分にまいた

その頃、里香は、高校の屋上にいた

「…ふん、いい気味ですわ、毛利蘭、私の恋の邪魔をしたコト、精々後悔するのですね…。」
フフフ…。」

不適に笑う里香の後ろには入学式当日についてきた友達2人がいた

「里香、次はどうする?。」

「もっと懲らしめちゃう？」

「いいえ、懲らしめるだけでは相手も攻めてきますもの、もっといい方法を考えなくてはなりませんわ。」

冷静に言う里香

空は灰色がかった

里香はそれぞれの教室に戻った

里香は上品に席に着く

丁度、授業開始のチャイムが鳴り教科担任が入り、号令をし、授業が始まった

里香はノートを取り始める
隣を見ると新一が眠たそうにしていた

しかし里香と目が合うとまるで軽蔑したような目で里香を見る

里香はそんなコトは予想済みだったため何も気にしなかった
それどころかもっとエスカレートさせ、蘭を地獄のそこへ突き落と
してやるうという思いを強く胸に抱いていた

ふと里香が蘭の席を見ると、蘭は真剣にノートをとって、一休みし
てはノートをとるといふ繰り返し

そのとき目が合った

里香は「ほら、ざまあみなさい。」という笑みを浮かべていたが蘭はニコニコの笑顔を送り返してきた

それどころか手まで振ってきた

里香は無視し、再びノートをとり始めた

『本当に気に入らないヤツですね。懲りている気配が全然感じられていませんもの。』

もっと悪いことをしないと懲りる様子はありませんわね。何がよろしいかしら…』

と里香はノートをとりながら思っていた

そんなこんなで授業は進み、やっとお昼の時間に

里香は自分のお弁当を取り出した

隣の新一のほうを見ると新一は何も出していなかった

里香にとってはこれがチャンス

『新一様、お弁当をお忘れになってしまったのかしら。私のお弁当を分けてあげれば絶対、私のポイントは上がるはず…』

『よーし…』

「あの新一さ…」

「新一！！」

里香が新一を呼ぼうとすると蘭が新一を呼んだ
新一はクルリと蘭の方をむく

里香もつられて向いた

「ハイ、新一のお弁当だよ。」

蘭が青い弁当包みを持ってきた
新一に渡す

「サンキュー、蘭！」

里香は愕然とした、それどころか蘭に倍以上の恨みが増えた
新一は蘭の手を心配してる様子で蘭の手をみていた

蘭は「大丈夫、心配してくれて有難う」と笑顔で返事を返す
里香は結局、1人お弁当を食べることになった

が

「里香ちゃん、一緒にお弁当食べよ!」

蘭が来た

里香はそれを避けるように席を立ち教室を後にした

蘭は追いかけてしようとした

「蘭、もうあんなヤツほうっておきなさいよ!」

しかし園子が蘭を止めた

蘭は残念そうに顔を下に向け「うん」といった

新一は里香の去った後を見ていた

放課後になった

里香は1枚の書類を手に持ち、ある部室の前にいた

部室の看板には

空手部

と書かれていた

コンコン

扉をノックすると1人部員が出てきた

「どちらさまでしょうか？」

汗をかいているのかタオルで汗を拭きながら聞く女部員

「あの、空手部さまはこちらでよろしかったでしょうか？私、2年B組の如月里香と言う者です。

興味から空手部くわてに入部を希望したいのですが…。」

里香は作り笑顔で承知印のついた書類を見せた

女部員は里香を空手部の部長に会わせ、挨拶し、承知印のついた書類を見せた

部長は承知し、顧問の元へ連れて行き顧問にも同じことをし、顧問も承知

正式入部となった

「空手の基礎は幼少期からつけられていたので完璧に出来ますの、
今でも習っておりますわ。」

里香はいうと顧問はためしに見せてくれといい、1人の部員を連れ
てきた

勝負は見事に里香の勝利

顧問は驚いていた

Story 02 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/3 桜実保乃佳

Story 03

里香が空手部に入部してから1日目
今日はトレーニングの日

校外を走るというスポーツ系には基本のトレーニングだ
蘭はキャプテンのため、先頭を走る

近くの公園を走り、近くの住宅街を走る

しかし事件は起こった
里香は蘭の後ろ

また何か悪巧みを考えているような笑みだ

里香はふらつくふりをし、蘭の前へ出て、見つからないように足掛
けをした

ズシヤ

激しく転ぶ蘭
一斉に止まる

里香はばれないようにひっそりと元の位置に戻り、足踏みをした

「申し訳ございませんわ、久しぶりに走ったものですからふらついてしまいましたわ。」

わざとらしくいう里香

しかし蘭は怒った様子を1つ見せず

「いいよ、里香ちゃんこそ大丈夫？さ、皆、もう少しだよ！ガンバロ！」

と逆に里香をかばう

そして再び走り出した

「お疲れっしたーっ！」

後輩や先輩が帰っていく

蘭は鍵を閉める当番なので1番最後に出ることになった

しかし蘭のほかにもう1人いた…

里香だ

「ねえ、里香ちゃん、私そろそろ、帰らなきゃいけないんだ。新一、待たなきゃいけないし、夕飯のしたくもしなきゃいけないの。」

もしまだいるんなら私の代わりに鍵、かけてくれないかな…。」

頼む蘭

里香は「よろしいですよ。」と作り笑いで蘭から鍵を受け取った…

そのときだった

ヒュ
バ

「っ！」

里香は受け取った思いきや、後ろを向き回し蹴りをした
見事に蘭の頬を掠った

「部室の鍵を閉めるのは蘭さん、キャプテンの仕事ですわよね？
それでは宜しくお願いいたしますわね。」

そのとき

「蘭！」

サッカー部の練習が終わったのか新一が来た

里香は新一を見てフツと笑い今度は蹴り、頬を強く掠った

蘭は頬を押さえる

見事に擦り傷が出来た

少し、血が滲み出てきている

「如月、テメーっ！」

新一は怒り爆発

里香はクルリと後ろを向くと

「毛利蘭、ざまあみなさいですわ。」

何て無様で汚らわしい姿…。せっかくの顔が台無しですわよ？

あら、新一様ですわね。お話なら今日は無理ですわよ。これから
バイオリンのレッスンがありますの。

お話はまた明日にしましょう？では、失礼いたしますわ。」

と不敵な笑みを浮かべたような声でいい、新一らの前を去った

新一は蘭の頬を押さえた

蘭の目にはたくさんの涙が溜まっていた

新一は蘭を保健室へ連れて行った

「失礼しますって出張かよ。ま、勝手に借りてもいいか。」

新一は蘭を座らせ、消毒液等を用意し蘭の手当てを始めた

脱脂綿に消毒液をしみこませ、蘭の頬を当てる

蘭は微妙に沁みるのか一瞬顔を顰めた

そして新一は湿布を蘭に渡して蘭は自分で湿布をはった

蘭は笑顔で礼を言っていたが、心からの笑顔は完全に消えていた

Story 03 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/4 桜実保乃佳

Story 04

（次の日）

「新一、おはよっ！早く学校行こうよ！遅刻しちゃうよ？」

蘭は洋館の前でインターホンに向かって言った

新一は眠たそうに頭をかきながらスクールバッグを持ち、口にパンをくわえてきた

そして自棄にパンを食べると髪をくしゃくしゃにしながら門を閉めた

新一は蘭の表情を見た、蘭はにこやかな表情だったが新一は作り笑いをしているということはずぐに分かった

そしてまたホームズの話だの事件の話だのと新一が大好き話をしながら学校へ向かった

新一は楽しそうに話すが蘭の表情を気に掛けていた

やはり表情は笑ってるようだが表情は悲しそうな顔だった

蘭は無理に作り笑いをしていた

新一は途中で話すのをやめた

「…蘭、1人で抱え込むなよ…。あ、の、だな…か・体に良くないからなっ／／／」

新一は赤面しながらも蘭の目を見ていった
蘭も赤面していたが

「…有難う新一。とっても嬉しい！」

と今度は心からの笑顔で返した
そうしてるうちに2人は校門前にいた

「園子、おはよーっ!!」

蘭は元気よく教室のドアを開け、園子の元へ行つた

園子は蘭の元へ行き笑顔で「蘭、おはよっ」と挨拶を返した

するとそこへまた

「皆様、お早うございますわ…。」

と礼儀よく里香が入ってきた

クラスの殆どはまあ簡単に挨拶すればいいだろうと思ひ適当に挨拶を返した

里香は新一の隣の席にかばんを置き

「新一様、お早うございますわ。今日もいい天気ですわね。気分も良くなるのではなくって？」

とにこやかに挨拶

新一は返事1つ返さず、無愛想に里香を一瞬見ただけだった

里香は気にせず、そのまま席に着いた

そしてHRが始まり、どんどん時間は過ぎて1番長い休み時間になった

新一は「如月、話がある。」と里香に呼びかけ、里香を屋上に呼び出した

「お話って何ですか？」

里香が風になびく髪をおさえながら新一に聞いた
新一は怒った顔をし里香の元へ

「如月、もう蘭に手を出すな。何が不満なんだよ。」

と新一

里香はフツと小さく笑うと

「ただ毛利蘭という存在が気に入らないからやってるだけですわ。」

いつそのことこの世から消えればいいのに…。

新一様だけに私のスケジュールを教えて差し上げますわ。これから毛利蘭をどんどん追い詰めて…

仕舞いには、毛利蘭を不登校まで追い詰めるんですよ…。どう？面白でしょう？」

と笑いながら言った

「あんだと！テメー、もう1回言ってみろ！！」

新一は女とも関わらずに里香の胸倉をつかんだ

里香は新一の手を払いのける

「新一様に口出しする権利はございませんわ…。そろそろ授業が始まりますので失礼いたしますわ。」

里香は綺麗にお辞儀をすると屋上を去った

「はい、ココ、テストで出す予定だからしっかり復習しなさいね！」

今は英語の時間、英語の女教師が黒板を叩いて重要と示している
新一はただ適当にメモリながら蘭の様子をチラリと見ていた

蘭は懸命にノートを取っている

ちょうど目が合った

蘭は小さく手を振る

新一は小さく微笑んだ

そのときだった

蘭の表情がいきなり険しくなり、ノートを書いている手が止まった

そして…

…サ下

「蘭！？蘭！」

蘭は倒れてしまった

Story 04 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/5 桜実保乃佳

Story 05

「蘭!？」

蘭はその場に倒れこんだ
教科担任が言葉に反応し、後ろを向く

「毛利さん!？毛利さん!大丈夫ですか!？」

教科担任は教科書を教壇におき、蘭の元へ

倒れている蘭を揺する

里香は睨み笑いで蘭を見ていた

「罰が当たったんですわ。毛利蘭、いい気味ですわ。」

と小さく里香は呟いた

新一は、蘭の元へ行き、蘭を抱き上げた

「俺が保健室へ連れて行きます。構わず授業を続けてください。」

といい、新一は教室を出て行った
教科担任は「授業を続けますよ。」といい、再び授業を再開

だが

「せ・先生…、わ・私ちよっとお腹が痛いんですの。保健室に行かせていただけませんかしら？」

里香が迫真の演技、新米の教師は全て信じ込んでしまい行っていいと許可を出してしまった

里香は作り笑いで礼をいい、去っていった

「先生、失礼します。」

新一が保健室の扉を開けた
養護教諭がいた

そして蘭をベッドに寝かせ、
熱を測った

ちよつきり38度

「毛利さん、熱あるわよ。工藤君、毛利さんに何かあったの？
多分、原因は疲労、ストレスよ。」

体温計を見ながら言う養護教諭
新一はすぐに思いついた

そのときに

「…う…。」

蘭が目を覚ました

「あら、毛利さん、お目覚め？貴方、熱あるから早退しなさい。担任には私から報告しておくわ。」

悪いんだけど、工藤君、毛利さんの傍についてあげて…
そして彼女を家まで送ってあげてくれないかしら、私、今日。外
せない急用が出来ちゃったのよ。」

「は、はあ…分かりました。」

「じゃ、お願いね。」

養護教諭は早足で保健室を去った

新一は近くにあった、椅子に座った

「蘭の熱、ストレスと疲労から来る発熱だってよ。何かあったのか？」

新一は蘭に聞く

蘭は

「最近、空手とか勉強とかで疲れとかが溜まってるのかもしれない。心配してくれて有難う。」

もう大丈夫、心配掛けてごめんね？」

と笑顔で答えた

保健室の外から里香は悔しがっていた

「なんてヤツなの…！…あ、そうだ。」

「あ、たたたた…痛いですわ。あら、新一様、毛利さん。」

里香は演技をしながら、保健室に入ってきた
ちゃんと腹痛を訴えるようにお腹を押さえながら

蘭は起き上がる

新一も里香のほうを向く

「里香ちゃん、お腹痛いの？」

蘭が心配そうに聞く

里香はキョロキョロと辺りを見回して、養護教諭がないことを確認

「…毛利さん、一つ、私からお願いがありますの…。
私、携帯を持ってるのだけど、メールアドレスを交換しませんこ
と？」

里香は携帯を制服のポケットから取り出す
蘭は笑顔で

「いいよ！私、もっと里香ちゃんと友達になりたい！！」

とOKを出した

が新一は怪しい目で里香を見ていた

そして蘭は新一に送ってもらい、自分の家まで帰っていった
里香はその後姿を見送っていた

『…さて、作戦、開始ですわ。』

と怪しい笑みを浮かべながら…

「…新一、送ってくれて有難う、でも新一、学校、戻らなくていいの？」

私のことなら大丈夫だから気にしないで、誰かさんと違って熱があるときでも事件に行って風邪引くようなおばかじゃないから。」

蘭が玄関前で言う

新一はしかし帰らないと一点張り

どこまで蘭を愛しているのだろうか…

しかし結局、蘭に説得され新一はしぶしぶ学校に戻っていった

でも新一ときたら学校が終わると部活をすっぽかし、毛利探偵事務所にやってきた

蘭はパジャマ姿出てきたため、新一は興奮し、倒れ、鼻血を出していた

逆に蘭に迷惑だった

「今帰ったぞ…ん？ななな、何で探偵坊主がココにいるんだ！？おい、部活はどうした！」

帰ってくるなり毛利小五郎は驚いて新一に聞く
新一と蘭はコトのあらましを説明

小五郎は納得してくれたようだったが

「おい、探偵坊主、俺の娘に手を出してないだろうな。」

と新一の顔を覗き込んだ

新一は苦笑してしてないと否定した

「てわけで、私、料理も食べたくないし、作れないから今日はお父さん、ポアロで食べてね。

何かあったら連絡して。私、寝るから、新一、有難う。

じゃあ、明日、学校でね。」

蘭は自分の部屋へ入ってった

新一は小五郎と同じタイミングで事務所を後にした

「...た...」

蘭はベッド入ったが眠れなく、少し携帯をいじっていた
そのときにマナーブザーが鳴り、Eメールのサイン

あて先を見ると

里香ちゃん

と書かれている

蘭は「あ、里香ちゃんからメールだ。」と少し胸を弾ませて、メールボックスを開き、本文を見た

しかし…

ガタン

蘭は、携帯電話を落としてしまった…

Story 05 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/6 桜実保乃佳

Story 06

次の日、蘭は体調も回復し、再び学校へ来た

しかし、病み上がりなのか少し顔色が優れない
園子は大事をとって早退したほうがいいのかと蘭に気を使
ったが

蘭は気にしなくていいといい、園子に笑顔で礼を言った

再び教室に里香が入ってきた

「皆様、お早うございますわ。」

と綺麗なお辞儀をしながら…

里香はかばんを置くと蘭に目をやり、目が合つとまたそっぽを向く
という繰り返し…

やることが子どもだ

蘭は里香の目をずっと気にしていた

とうとう蘭は里香の席に行き

「里香ちゃん、話があるの、一緒に屋上へ来てくれない。」

と里香を屋上へと誘い出した

里香は「いいですわ」とフンと笑い、屋上へと着いていった
新一は密かに追っていた

「ねえ、里香ちゃん、変なこと聞いちゃっただけど、何で私のこと嫌ってるの？」

蘭は聞いた、真剣な目で…

「はあ？イキナリ何を聞き出すと思いきや…まあ、いいですわ、この際教えて差し上げますわ。

私は、心のそこから毛利蘭、貴方を嫌っていますわ！！

理由なんてドコにもありませんわ。ただ全てが大嫌いでしょうがないんですの！

あれもこれも…貴方をいつか工藤新一様と別れさせてやりますわ！
貴方を地獄のどん底まで落としてやりますわ…、楽しみに待っていてください…。」

里香は笑いながら、蘭の耳元で囁いた

蘭は一気に鳥肌が立った

「ざまあみなさい！私の目の前でいちゃいちゃするからこんな目に遭うのですのよ！」

大きい声でいい、里香は屋上を去った

蘭は「待って」といおうとしたが、声が出なくなってしまった

里香は屋上に入り入りする出入口の手前で欄の様子を見て、貶すような笑みを浮かべ、去った

そのとき

「おい、テメー！如月、蘭まで呼び出してどういっつもりだ！」

と新一が胸倉をつかむ

里香は手をはたくと

「貴方には関係ありませんわ！」

と去っていった

新一は里香の後姿を睨んでいた

一方蘭は屋上の手すりに身を寄せていた

「新一…、貴方を巻き込みたくない、その一心で笑顔を絶やさず
いたけれど…」

ゴメンね、もう限界だよ。もしもその場にいるのなら…出てきて。
私を慰めて、抱きしめて…。ねえ、新一、お願い…。」

と涙声で呟いていた

新一はその言葉を聴いたが出てこれなかった

蘭はずっと呟いていた…

「新一、お願い、出て…来て…：うっ…。
お願い…い。ハアハア…うっ…」

蘭は胸を押さえ、荒い息になっていく
パニくり、過呼吸になってしまい、足の力が抜け、その場にしゃがみ込んでしまった

新一は屋上に出て、蘭を支える

「良かった…、新一、出てきてくれたんだね。私、嬉しいよ…。」

荒い息で蘭は笑顔で新一に言う

「…蘭…、ゴメン。俺のせいで…。」

新一は蘭を強く抱きしめて謝った
蘭は小さい声で「新一、好きだよ。」といい、新一の頬にキスをした

Story 06 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/7 桜実保乃佳

S t o r y 0 7 (前書き)

過呼吸の日と同じ日　そしてあの人が登場

蘭は新一に支えてもらい、保健室に行き、過呼吸の対処をしてもらい、再び教室へと戻った

新一は里香へ怒りを見せ付けるかのように椅子に座る
しかし里香は全然気にしていなかった

その様子を心配そうに見る蘭と自分の席でその様子を見ていた園子
しかし、授業が始まると授業に集中し始めた

そして授業が終わると園子は新一を連れて廊下へと連れ出した

「ねえ、新一君、何隠してるのよ、蘭に何かあったの？教えてくれ
たっつていいじゃない。」

もしかして、誰にもいえない恋話？」

園子がいう、新一は静かに首を振った

「んなコトだったら蘭だってあんな顔してねえよ。原因は如月だよ。
理由はまだ分からないが何かしら蘭に目をつけてるんだよ。」

園子だって前見ただろ？蘭の頬に湿布がはってあるのを…。」

「ええ…、まさかそれも如月里香って子が…。確か空手部に入部したのも蘭目当てってコト…？」

園子は目を丸くし、新一に自分の考えを言う

新一は「多分」と頷く、そして里香が前に教えてスケジュールを教えた

「あら、今度は鈴木さんにも目をつけてさしあげますわよ…？」

フツと笑う声が聞こえ、園子と新一は振り向いた

そこには腕を組みながら小さく不敵な笑みを浮かべた里香がいた

里香は組んでいた腕を解き笑顔で新一と園子を見た

「如月さん、別に貴女が私に目をつけようと勝手にすればいいわ。それに新一君に聞いたわ

最低…いえ、最低以下よ。蘭を不登校に追い込もうなんて

馬鹿げた事をするのね。蘭が不登校になるわけじゃないじゃない！蘭はそんな事じゃへこたれないわ。」

フンと鼻を鳴らす園子

「あら、じゃあ、楽しみにしていますわ。」

里香は園子同様鼻を鳴らし、教室へと入っていった

「新一君、蘭なら絶対へこたれないわよね。私たちでサポートするわよ！」

園子が気合満々で言うが、新一は浮かない顔

「園子、蘭はもう駄目かもしれねえよ、^{アイツ}蘭から笑顔が消えかかっているんだ…。」

新一は肩を落とすように言う

園子は一瞬顔が曇ったが

「駄目よ、新一君！」

と新一に強く言い出した園子

新一はその言葉に目を丸くした

「蘭が暗いときだからこそ、私たちでしっかりサポートしなきゃ！！
笑顔が消えかかってんなら私たちで蘭の笑顔を取り戻せばいいで
しょう？」

未来の旦那がそんな弱気になってちゃ新一君の嫁がもつと不安に
なるでしょ！！

「しっかりしなさいよね！」

園子が笑顔で新一の方をバンバンと叩く

新一は「あだだだだだ…！」と痛がっていたが

沈んでいた顔もいつのまにか消えていた
そして2人は教室に戻った

〜次の日〜

「蘭、学校行くぞ!」

新一は元気に毛利探偵事務所を訪れていた
しかし蘭は出てこない

新一はもう1度同じように言うが蘭からの返事は返ってこない

「…新一、ゴメン、今日はちょっと調子が優れないんだ、学校からは私から連絡しておくからゴメンね…。」

園子が心配してたら大丈夫だよっていっておいてくれる?」

か細い蘭の声、新一は「ああ」と返事をする。探偵事務所の階段を下り、学校へ向かった

「はーっす。」

いつもより元気なさげに教室に入り挨拶をする新一
園子は真っ先に新一の元へ行った

「蘭は？」

「ああ、体調が優れないから今日は学校休むとよ。大丈夫だとはいってだが…。」

園子が心配そうに聞くと新一は蘭に言われたとおりの返事を返した
園子は頷いた

そのときに担任、美和由貴が入ってきた

「今日は転校生がいるんです、入ってきてもらいましょう。入ってきてください！」

美和が呼ぶと転校生が入ってきた
赤がみがかった茶髪に軽いウエーブ

そう

「今日から2・Bのクラスメートになった」

「宮野志保です。宜しくお願いします。」

宮野志保だった

園子と新一は目を丸くして驚いた
その様子を里香は見逃さなかった

志保は新一の後ろの席になった

「宮野、どついつことだよ。俺、博士から何も聞いてねえぞ。」

美和の目を盗んで小さい声で言う新一
志保は

「解毒剤の研究が上手く言ってるかどうか試してみてるのよ。貴方の経過も観察することも含めて帝丹高校に転校したのよ。」

宜しくね？工藤新一君？」

と小さい笑みでいった

新一は「ああ」というだけだった

志保は蘭の席を見つけ蘭がいないことに気付く
新一に聞こうとすると

「毛利蘭ならもう帝丹高校には来ませんわよ。」

里香が変わりに不適に答えた

志保は疑問を持ち、園子同様休み時間に新一を廊下に呼び出した

新一は全てを話した

Story 07 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/8 桜実保乃佳

Story 08

志保は新一の話を聞いてから、就寝するまでずっと作戦を園子と新一を呼び出し、考えていた

蘭はその場にいなかったのでもいいチャンスだった

蘭に聞かれてしまったら一巻の終わり…

そんなわけで今は工藤邸に3人集合中

「で、どうするの？」

園子が書斎の椅子に座り、回る式の椅子をグルグルと回したりしながら聞く

新一は苦笑

「オメー、ココは俺の家だってコト、分かってんだよな？」

と静かに新一は言った

園子は「まあ、いいじゃない」と流す

呆れる新一

「はいはい、2人してそこで遊んでなくていいから。」

パンパンと手を叩く志保

『俺らは幼稚園児かよ…』

再び苦笑する新一

そしてまた作戦を練り始めた

「んで、まずは如月をどう対処するかだな。さっき、皆にも話したように、蘭を不登校にさせるまで追い込むつもりだ。

如月もマークしなきゃいけないけど、蘭の方も見なくてはいけない。

俺と如月、席となりだから色々と話してみる。宮野も如月の後ろだし今日協力頼むぜ。

で、園子は蘭の後ろだから蘭を頼む。」

「了解」

声を合わせて返事をする2人

そして解散となった

しかし、志保と新一だけは残っていた

「なあ、蘭のこととは全く関係ねえんだけど、宮野、元の姿に戻って高校に転校するなら俺に一言言ってくれたっていいじゃねえか。」

新一は椅子に座って志保に聞いた
志保は「相変わらず大きな書齋ね、隙間なくぎっしり推理小説ね…。あ、これ面白そうね、借りてくわ。」と本棚から推理小説を取り出している

「おい、聞いてんのかよ。」

新一はよっかるのをやめて志保のほうを見て聞いた
志保は手に取っていた小説を見ながら振り向いた

「ええ、だからいったでしょ？実験のためしだって…、貴方の経過観察もかねてるって。」

別に秘密にしていたわけじゃないわ、だって分かればいいと思っ
て…。あ、こんな時間だわ、

もうそろそろ夕食の準備もしなきゃいけないからじゃあまた明日
ね。探偵さん？」

さらりと言つ志保

そして何冊か推理小説を持って帰っていった

新一は書齋で呆然としていたが再び自分なりの作戦を練り始めた
しかし頭が回らず、結局は推理小説に手を伸ばしてしまった

そして夜が更けるまで読みふけていた

その頃、志保は買い物ついでに毛利探偵事務所を訪れていた
階段を上がり3階のリビングまで買い物袋を持ち足を運ぶ

インターホンを鳴らす

「蘭さん、私、宮野志保、じゃなくて灰原哀よ。ちよつとご挨拶に来たの。」

あけてくれないかしら？」

志保が呼びかけても蘭は一方に出てこなかった

志保がドアノブを回すと扉が開いていた

志保は「おじやまするわ。」と静かに入っていった

「蘭さん？いるんでしょう？返事して頂戴。」

志保が言っても声は聞こえない
そのとき

「あ、志保さん…、ゴホッゴホッ…。」

「蘭さん、大丈夫？」

と蘭がふらついて出てきた

志保は蘭を慌てて支える

「貴方、熱あるじゃない。何で私や工藤君に連絡を取らなかったの？」

支えながら言う志保

「だって迷惑掛けたくなかったんだもん。」

小さく微笑みながら言う蘭

「何言ってるんだよ、迷惑なわけねえだろ。」

そこへ新一の声が聞こえ、駆け込んできた
志保に代わり、蘭の体を支える新一

蘭は新一に抱かれ、寝室へ

蘭は布団に入るとすぐに眠りについてしまった

新一は蘭の寝顔を少し見つめて、寝室を後にした
そしてせめて自分に来ることを最低限でもしようとお粥を作ることに

しかし…

「工藤君、貴方何作ったの？未確認食品誕生？」

新一が作ったのは紛れもなくお粥とは別のもの

志保が味見

「…ゴホ、蘭さん、これ食べたらもっと風邪をこじらせるわ。もう私が作るからかしなさい。」

志保は咳払いしながら蘭のお粥を再び作り始めた

新一は蘭の寝室にそっとお粥を置いてきた

Story 08 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/9 桜実保乃佳

Story 09 (前書き)

今回は里香お嬢様の家庭事情が明らかに…？

萩谷唯^{はなづゆい}(34) … 如月家の執事、里香に仕える、里香は「萩谷さん」と呼んでいる

「ただいまですわ…。」

里香は靴を丁寧に脱ぎながら挨拶をするが、しかし返事がなかったそのとき

「おかえりなさいませ、里香様、ご夕食の準備は整っております。」

と1人の女執事が出てきて、里香の上着やかばんを受け取る

「そうですか…、あの、お父様とお母様はまた今日も帰りが遅いんですの?」

里香が少し寂しい瞳をして聞く

「旦那様は会議で帰りが遅くなると…、奥様はまたテレビの出演を依頼されて今日から米花町から北海道に飛び立つそうです。」

執事は丁寧に言う、里香は少し俯いて「そうですね。」といっただけだった

里香はリビングのソファに座る

テレビをつけると丁度、如月財閥のニュースが流れていた

内容によると、如月財閥でまた新しいホテルを経営し始めるという内容だった

里香は少し目を通すと内容を話している半ばでテレビの電源を切った

「あの、萩谷さん、夕食、お粥でお願いできませんかしら？」

あまり食欲がないんですの…あと、悪いんですが私のお部屋まで運んできてくれませんか？」

里香は静かに言うと萩谷は「畏まりました」と返事をし、その場を去った

里香は自分の部屋に戻った

1人部屋にとっては大きすぎる部屋

里香は制服から私服に着替え、勉強をするため机に向かう
勉強していると

「里香様、失礼いたします。」

萩谷がお盆にお粥を乗せてやってきた

里香は勉強机から別の机へと移動し「いただきます」と手を合わせ
て挨拶をし、食べ始めた

すこしして食べ終わると自分で食器を提げに行く

そして再び自分の部屋へ行き、勉強を済ませると、今度はベッドへ
と横になる

知らぬ間に零れ落ちていた涙

里香は小さい頃から忙しい両親に育てられたためまともに一緒に遊
びに行ったりしたことがなかった

誕生日でさえもすっかりとお祝いしてもらったのは2・3歳の頃の話

一緒にいる時間があまりない、一緒にいてほしいという思いも、素
直に言えずに時間は過ぎていく

気付けば自分の傍にいて世話をしてくれるのは専属執事の萩谷唯だけ

里香はいつでも自分は完璧ではいけないと思っていた
それは大きい財閥の一人娘〓跡取りだから

それ+昔から父親に言われ続けていた言葉があったから

「いいか、里香、お前は如月大財閥の一人娘だということを忘れてはならん。

絶対に何が何でもトップに立たなければならぬ、それを忘れるな。

」

これが父親の言葉

里香はその言葉を一時も忘れたことがなかった

家に帰れば高校2年だが大学入試に出るくらいの応用問題も完璧に解けるほどではなくてはならなかった

中学のテストも入試も全てN.O.1に輝いていた

家に帰れば勉強に終われる日々で親とも会話すら交わしていない
学校ではN.O.1ではならないと見栄を張っている

結局、里香は自分の居場所を見つけれないまま、暗闇の中で光を

探しているのが里香の毎日だった…

Story 09 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/10 桜実保乃佳

Story 10 (前書き)

次の日とは Story 08 の次の日です

「次の日」

「蘭、学校行こうぜ！」

新一は迎えに来なかった蘭の家、即ち毛利探偵事務所の3階に来ていた

父親の小五郎は珍しく事件が入ったとかで2・3日は留守中
蘭1人

しかし蘭は

「まだ病み上がりで少し調子が優れないの、今日、新出先生に診てもらいに行く予定なんだ。」

「明日には絶対に学校行くから…ゴメンね？」

とドア越しから声を返してくるだけだった

新一は仕方なく、1人で学校へ出かけた

そのため再び自分の家の前を通っていかなければいけなかった

そのとき、志保が出てきて一緒に行くことになった

「…工藤君、蘭さんはまた登校拒否？」

志保が聞く

新一は小さく頷いた

「如月のヤツはどこまで蘭を追い込むつもりなんだ…。」

小さく呟く新一

志保は少し顔を俯けた

「…ねえ、蘭さんの家に毎日通ってあげたら？」

彼女も少しは元気が出てくると思うのよ、でも工藤君がいけないときがあると思うから、私と賛成してくれたら園子さんも一緒に行くわ。

私も出来るだけのコトは協力させてほしいの…、だって私が今み

「たいに明るくなれたのも蘭さんのおかげだもの。」

と志保

「宮野、悪いな。迷惑掛けちまって…。宜しくな。」

「迷惑なんてないわ。工藤君、弱気になっちゃ駄目よ。」

新一は志保にお礼をいい、志保は少しの笑みで新一を励まし、学校へと少し歩く速度を上げて向かった

途中で園子とも合流し、園子は志保のアイデアに喜んで賛成した

「…新一様、お早うございますわ、あら、毛利さんはまた今日も学校お休みですか？もう不登校決定ですわね…。」

いい気味ですわ、そうそう毛利さん、もっと追い込む予定でしたが、下手したら死なれそうなのでやめますわ。

だって死んだ原因は私のせいだっていわれても困りますものね…。」

「

小さく高笑いしながら里香は新一にいった

そのとき志保が現れた

「如月さん、あなた、何を目的として蘭さんを追い詰めてるの？」

腕を組み聞く
里香は鼻で笑い

「見てるといらいらしますの、それに…、それに…。…ふん、やはり何でもありませんわ。」

と途中で答えるのをやめてしまった
志保は少し疑問に思ったが問い詰めるのをやめ、自分の席へと戻り、読書を始めた

そして放課後

「さあ、蘭の家に行くわよーっ！」

気合満々の園子、手には蘭の好きなお菓子を持っている
志保は気合と持つてるお土産に微妙に呆れながらも少し蘭に会えるのが嬉しいのか少し笑顔

新一は2人の歩いている少し後ろを歩いていた

毛利探偵事務所の3階へと上る

インターホンを押すと蘭が出てきた
そして3人を部屋へ上げ、自分の部屋へ案内した

「蘭！あなたの好きなお菓子持って来たよ！元氣出して！」

園子は土産袋を見せる

「園子、新一、志保さん、有難う、じゃあ、お茶にしよう？
飲み物持ってくるよ、少し待ってて。」

蘭は席を立つ

志保は手伝いに蘭とともに台所へ向かった

〈台所〉

蘭は少しの笑みでコップを出し、ジュースを取り出し、注いでいく

志保はその様子を見て

「蘭さん、つらいときは無理しなくていいのよ？ 私たちがいるんだから…。」

自分の思いを溜め込まないで。」

と蘭へ優しく声を掛けた

蘭は小さく「うん」と頷いたまま、お盆にコップをのせ、自分の家へ持っていった

〈蘭の部屋〉

「お待たせーっ！ ジュース出来たよー！」

明るく振舞う蘭に胸が痛くなる園子と新一

「園子、このお菓子の袋開けるよ？」

蘭はジュースと一緒に持ってきた皿をだし、お菓子を皿に出した
そして食べ始める

「蘭、ほんとに貴方、無理してない？」

何かあったら私や新一君や志保さんにいいなよ？

私は蘭の味方だからね？」

園子は蘭の手をとりいった

蘭は少し目を丸くしていたがやがてどんどん涙目になっていき、大
声で泣き始めた

「園子お、有難うー、私、辛かったんだよう！」

と強く園子に抱きついた

園子はうんうんと頷き蘭の頭を撫でた

夕日が寂しく沈もうとしていた

Story 10 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/11 桜実保乃佳

S t o r y 1 1 (前書き)

S t o r y 1 0 の次の日です

朝、毛利探偵事務所

小五郎は事件が無事解決し、探偵事務所に昨夜帰って来た

蘭は学校への登校拒否を小五郎にいえなかったため、仕方なく制服を着て、いつもどおりに振舞う

そしてまたスクールバッグを持って、家を出て行った

丁度、そのときに新一と志保とばったり会った

「新一、志保さん…。」

蘭は2人の名を呼ぶ

「蘭、はよっ！」

「蘭さん、おはよう。」

元気に挨拶する新一の隣で静かな感じを醸し出し、さわやかな笑顔で挨拶する志保

「おは…よ、新一、志保さん。」

作り笑顔で挨拶する蘭

それは見てもすぐに分かるような笑顔だった

「学校、行こうぜ！」

「遅刻してしまうわ、蘭さん、早く行きましょう？」

志保は蘭の手をとって言うが

「う・うん…、でも怖いよ…。里香ちゃん、また何かされるんじゃないかって思うと怖いのよっ！」

蘭は泣き崩れてしまった

志保はしゃがみ、蘭の背中を摩る

蘭は顔を覆い、顔を隠して静かに泣いている
志保はゆっくりと立ち上がる

新一は静かに蘭の元へ行く
そして志保同様、しゃがんだ

「蘭、大丈夫だ、俺たちがついてる…。何かあったら俺たちで蘭の
コト守ってやつから！！」

心配すんな…。俺らは蘭の味方、仲間だぜ？」

と蘭の耳元でそつと囁いた
蘭は涙目で顔を上げた

「…新一…:…?」

新一は笑顔で頷いた

志保は蘭に手を差し伸べて、蘭を立ち上がらせる

「一緒に行こうぜ、学校！」

白い歯を見せて笑顔で言う新一
蘭はつられて笑顔になり…

「うん！そうだね、行こう！学校！私、新一と志保さん、そして園
子がいるから怖くなくなったよ！」

有難う、新一、志保さん！」

といつもの心からの元気で言った

志保はその様子を見て笑顔になり、3人は学校へと向かった

くその頃、帝丹高校く

高校生探偵工藤新一 LOVE 専用の部屋

「2・Bの中で工藤新一様を愛する、ファンクラブ会員の皆様、全員集まりですわね！」

里香が大きい声で聞くと一斉に、「オォーっ！」と声上がる
そして一斉に、会員証明書を取り出し、上に上げた

里香はそれを確認するような目で見ると

「では工藤新一様のためならどんなことでも出来ますわね！」

再び「オォーっ！」と大きい返事が返ってくる
里香はその言葉を聴くとニヤリと笑みを浮かべ

「毛利蘭を陥れましょうではありませんの、賛成する者はその場にお残りになってくださいですわ！」

反対する者は今すぐこの部屋から出て行きなさい！！」

と大きい声で言う

しかし、皆、相当蘭を恨んでいるのか全員その場に残った

そして何か作戦をたて始めた

しかしそんなことも知らずに蘭は新一、志保と一緒に学校へ向かっている…

Story 11 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/12 桜実保乃佳

S t o r y 1 2 (前書き)

S t o r y 1 1 と同日です

蘭は少し励みのおかげもあって、少し元気に学校へと足を弾ませながら向かっていた

志保と新一は微笑んでいた

園子と学校で合流し、園子と蘭で話しながら校門を通り抜けていく

玄関で上靴に履き替えていると丁度、里香とばったり会ってしまった
園子は今まで楽しそうに話してたものの、里香と目が合うと一瞬で
笑顔が消え、里香を睨む

里香は鼻で笑い、その場を去った

志保と新一はその様子を見ていた

蘭は少し悲しい目をしたがいつもどおりの蘭にすぐに戻った

「…お・おはよう!」

蘭はゆっくりと教室のドアを開け挨拶をする

その後ろから新一、園子、志保がゆっくりと眠たそうに入ってきた

蘭は久しぶりの教室に胸を弾ませたのか、笑顔になっていく
しかし

「せーの行くよーっ!!とりゃあー!!」

バシャーっっ

「…え？キヤっ！」

「「「蘭(さん)！」」」

「キヤハハハっっ！作戦大成功っ！」

「毛利蘭、ざまあみなさいですわ！！」

蘭の真上から水が落ちてきた

蘭に命中、制服は一瞬で、びしょびしょ

近くで女子生徒がクスクスと陰で笑っている
里香もそのうちの1人でクスクスと笑っていた

蘭はなにがどうなったのか理解できず、ただ呆然とその場に立ち尽くしている

新一も園子も志保も流石に驚いたらしく、一瞬その場に立ち尽くしていた

「蘭、大丈夫!？」

園子は制服のポケットに入っていたハンカチを取り出し、蘭の顔に当て、水を拭いている

「如月、ダメーっ!!!」

新一は堪忍袋の緒が切れたらしく、怒りのこもった足音を立てて里香の前へと歩く

志保も一緒に里香の机へと向かった

新一は何度目かは知らないが、また里香の胸倉をつかんだ
志保は

「工藤君、やりすぎだよ。」

と新一を止め、手を下ろさせた

新一「ハアハア」と興奮したのか荒い息を立てている

志保は里香の目を見て

「最低ね…。」

と呟き

パ
ア
ー
ン

「っ！何するんですの!？」

志保は思い切り、里香の頬を叩いた
まるで今の気持ちを吐き出すように

「これで叩かれたらどれだけ痛いってわかったかしら？」

志保はフツと鼻で笑いながら聞く
里香は相当悔しかったのか

「うるさいっ！！私に何も言わないでほしいですわ！」

と志保の頬を叩き返す

結局、クラス内では凄いことに…里香と志保のもみ合い

しかし志保は相手にしてなく、里香が一方的…

蘭はその様子を見て怖くなり、志保と里香の元へと走っていった

「お願いっ！もうやめてよ、2人とも！」

蘭は2人の間に割り込んだ

そのとき丁度、タイミングよく、担任が入っていき、クラス内のもみ合いは丸く収まった

志保は里香に叩かれたりして、擦り傷等が出来たため、蘭に連れられて保健室に行くことになったが

新一と園子もついていくコトになった

「志保さん、ゴメンね、私のせいだよね…。」

私が私が学校なんかに行かなければ良かったんだよ…。そうすればこんなことにはならなかった…。

志保さんも怪我はしなかった…、ごめんなさい。」

蘭は手当てをしながら頭を下げ、泣き始めた

志保は「貴方のせいじゃない」と蘭をずっと励ましていた

新一と園子は影から覗いていた

園子は「何いってんのよ、私たち友達だから、大丈夫だからって前にいったじゃない…。我慢しないでよ…。蘭。」と涙声で呟いていた

Story 12 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/13 桜実保乃佳

S t o r y 1 3 (前書き)

S t o r y 1 2 と同日

蘭と志保は教室へと戻ったが、教室内では興奮が収まっていないらしく

志保と蘭が帰ってくると一瞬で静まり、近くの友達とこそこそと話し合ったりし始めた

志保は気にしないで自分の席へと戻ったが蘭は少しオドオドと自分の席へと戻り始めた

周りを気にするような目でキョロキョロと見ながら自分の席へと向かう

新一はその様子を静かに見守っている

園子も同じだった里香もその様子をニヤニヤしながら見ていた

蘭が里香のほうへと向かった

里香は座っていた向きを変えた

スッ

「…キヤっ!」

蘭はド派手に転んだ、里香が足掛けをしたからだ

「ちょっと、何するんですの!？」

蘭の転んだ方向には見事に里香の机があり、里香は倒れてしまい、
蘭の上に覆いかぶさっているような形に…

教室が少しざわつくが、蘭は急いで「里香ちゃん、ゴメンね。」と
謝るがそのすぐ跡に…

「…っ!」

蘭が一瞬顔を顰めた

里香が皆には見えないように尖った爪で蘭の首後ろにさしたからだった

それだけではなかった…

「毛利さん、早く起き上がってくれませんか？邪魔ですわ！」

と起き上がろうとする蘭の背中を踏みながらわざとらしくいう志保はその様子を見ていた

そして急いで立ち上がり蘭の元へ行き、里香の足を強引によけた

その衝撃で椅子がひっくり返り、里香は後ろへひっくり返ってしまった

「クスクス…」

里香の転び方が変わったのかクラス中から小さいからかい言葉や笑い声が聞こえ、里香は赤面し、恥ずかしがっていた

そして

「宮野さん、よくも私に大恥をかかせましたわね！」

と志保の頬をビンタ

志保は頬を押さえる

「如月さん、宮野さん！あとで職員室…生徒指導室でゆっくり3人で話し合いますよ？」

「話せば分かるから…ね？あと出来れば毛利さんから話を聞いたのだけれど…」

担任の美和は里香たちの元へ来て、肩をのせ、言い聞かせた

里香は小さく舌打ちをし、椅子や机の向きを元に戻し、頬杖をついた

蘭と志保もそれぞれ自分の席へと戻った

そして朝のHRホームルームが始まった

美和の話のときは皆、静かだったが1時間目の準備をしなさいと美和が出て行ったら

一気に騒ぎ始めた

園子と新一はお互いの目を見て頷いた

蘭は授業中も休み時間も疲れた顔をしている

園子や志保も蘭の机へと向かい、蘭を励ましたがやはり気分は上がっていないくいつもの蘭ではない

蘭は誰かに話しかけられても上の空でずっと窓の外を見ている

綺麗な青空が広がっているのに蘭の心は晴れなく曇っていた

昼食時間〓 昼休み、蘭が園子・志保と一緒に弁当を食べていると
里香がお弁当を持ってやってきた

「毛利さん、宮野さん、鈴木さん、さっきはゴメンなさいね、私
たらついついカアツとなつてしまいましたわ。」

「一緒にお弁当を食べませんか？」

お弁当の包み袋を見せて、ニコリと蘭に笑つる里香

蘭は小さく頷いた

里香は自分の席から椅子を持ってきて座る

蘭は「いただきます」と挨拶をし、弁当箱を開けた

自分の作つたおかずがぎっしりと隙間なく並べられている

里香も開けた

さすがお嬢様 と言えるほどの昼食ではないが庶民にとってはあま
りお弁当に入れられるようなものではないというものばかり

「里香ちゃんのお弁当、凄い豪華だね！」

蘭は里香のお弁当を見て感心している

フフンと鼻を鳴らす里香

「でも毛利さんのお弁当もなかなか負けてませんわよ…。」

蘭のお弁当を覗き込みながら言う里香
里香は一瞬不敵な笑みを浮かべた

そして…

「よいしょつと、…あ、上手く足が入りませんわ、毛利さん。ちよつと失礼っ！…！」

グ
シ
ャ

「あ、お弁当がっ!!」

蘭のお弁当は落ちてしまったいや、正確に言えば里香に落とされた…

里香はわざと机を激しく揺らし、蘭の弁当を凄い勢いで落とした

志保と園子はとっさに立ち上がる

「キヤハハハ！成功しましたわ！！ざまあみなさい、毛利蘭!!」

お嬢様笑いをし、貶す里香

「如月さん!!」

と園子

「蘭さんのお弁当が駄目になっちゃったわ…。
貴方の仕業よね、蘭さんの気持ちを知らないからこんなことが出
来るのよね？」

「じゃあ、貴方も同じ目にあわないと分からないようね…。鈴木さ
ん、自分のお弁当箱ちゃんと持っててよ？」

「いくわよ…。」

志保は里香同様激しく机を揺らしたみごとにお弁当箱はグシャグシ
ヤに…

里香は悔しがり、自分の席へグシャグシャになったお弁当箱を持っ
て椅子を持ち、自分の席へ帰っていった

Story 13 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/14 桜実保乃佳

Story 14 (前書き)

今日は里香ちゃん
と蘭ちゃんが
中心になり
そうです

Story 14

蘭は、1人で屋上に来ていた

高いところから見下ろす町は本とに自分がこんな小さく見える町に住んでいるのだろうかと思えるようだ

柵を乗り越え、飛んだら羽が生えてどこまでも飛んでいきそう

蘭は空を見上げた

空も低く見えて、手を伸ばしたら届きそう

もしかして、虹がかかったら虹の滑り台なんていうのも素敵だななんて思う

自然に笑みが漏れる蘭

それと同時に零れ落ちる涙

そのとき里香が来た

「…あら毛利さんではありませんの。こんなところで何をなさっているの？」

里香は髪を耳にかけ、柵にもたれかかる

里香はフツと笑う

蘭の笑顔はなくなった

「ねえ、毛利さん^{あなた}、おかしいこと考えているんじゃないですか？
手を伸ばしたら空の雲に届きそうだとか、ここから飛び降りたら
羽が生えてきてどこまでもいけるのではないか。
もしも虹がかかっていたら虹の滑り台に乗れるのではないか。
なんて馬鹿なコト、考えてませんわよね？」

フツと笑いながら言う里香
蘭は胸が痛くなる

自分の考えを見過ごしたように当てられたから
そして馬鹿にされたから…

「あら、その顔は凶星のようですね？子供の考えるようなこと
にやけるなんて幼児以下ですわね…。
ばっかみたい…。」

里香は蘭を貶す

そして蘭の元を去ろうとした
そのとき…

「夢ぐらい持ってたっていいじゃない！貴女が私にそんなこと言う
権利はないの！！もついい加減にして！

たかが皆より地位が少し高いからって…、お金持ちだからって…
園子見たいに振舞う人のほうが私は大好き、里香ちゃんなんてお
金持ちと言うことしか頭にない！！」

蘭は里香の腕をつかみ、泣きながら里香に大きい声で怒鳴った
里香はカアっとなり

「毛利蘭、ふざけるものではありません！地位の低いものは低いんですの、それくらい理解をしなさい！」

と蘭の頬をビンタした

蘭は強く叩かれたためか、柵へと飛ばされ、思い切り頭を打った

「っ…。」

蘭は頭を抑える

「フツ…、私に逆らうからこんなことになるのですのよ？もしも次、今みたいなことをいったら…」

これだけじゃすみませんわよ…、覚悟しておいてほしいですわ。」

蘭の元へいきしゃがみこんでいる蘭の髪の毛をつかみグイッと引っぱり、頭をガンとぶつける里香
顔を顰める蘭

里香は笑いながら去っていった

「蘭!？」

新一は伏せていた顔を上げた

「どうしたの、工藤君。」

新一の机にいた志保が聞く

「今、一瞬、蘭の悲鳴が聞こえたような気がしたんだ…、俺、1回屋上いつてくる！」

新一は勢いよく椅子から立ち、教室を飛び出して屋上へ向かった
志保も念のためと屋上へ向かった

園子はお手洗いに行っていたが蘭の後を追った

「蘭！」

「蘭さん？」

勢いよく屋上の扉を開ける新一
急いで蘭の名を呼ぶ

志保も名前を呼び始める

園子はすぐあとに来て新一から事情を聞き蘭の名前を呼ぶ
辺りを見た先には

「「「蘭一（さん！）」」」

蘭がしゃがみこんでいた

3人は駆け寄る

「新一い、志保さぁん、園子お……。どうしようっ……」

手の平を見せて震える蘭
血がべつとり……

「蘭、どうしたの、その血！まさか如月さん……が？」

園子が恐る恐る聞くと蘭は小さく頷いた

「傷は浅いけど一応、保健室の先生と相談して病院行って確かめて
もらったほうがいいかも。」

志保は傷を見て適切な判断を下す

蘭は小さく頷き4人は屋上を後にした

Story 14 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/15 桜実保乃佳

Story 15 (前書き)

今回は里香お嬢様メインです

また今はいらいらしているので殴り書きで…文章が汚いのです。
申し訳ありません

里香は部活を終え、家に帰っていた
そのとき

「おい、如月、今帰りか？」

と1人の男性の声があった

里香は声のしたほうをくるりと振り向く

「…工藤新一様、何か御用ですか？私、忙しいんです。これから
レッスンがあるんですよ…。」

失礼いたしますわ。」

里香は愛想良くお辞儀をすると再び歩き出した

新一は当然、里香を帰らせるわけもなく、里香の腕を強く握った

里香はグイグイと引っ張るが、強く握られているためかはなれない
新一は抵抗する里香に無表情で睨む

「放しなさい！警察を呼びますわよ！！…ハアハア…っ！」

里香は相当勢いよく言ったためか息切れを始めた

しかし新一は手を放さない

里香は観念したらしく抵抗をやめた

「分かりましたわ、今日のレッスン、時間をずらしてもらうことにしますわ。

お話なら手短にお願いいたしますわ。そこに丁度いい、喫茶店がありますわね。

ゆつくり珈琲でも飲んでお話ししましょうではありませんの?」

里香は丁度目先にある喫茶店を指差した

新一は頷き、2人は喫茶店に入っただった

「いらっしゃいませ、お客様は2名様までよろしいでしょうか？」

エプロンをしているウェイトレスが愛想良く聞く、新一は頷くとウェイトレスは「こちらへ」と新一らを席へと案内した

席に着くとウェイトレスは、新一らの席に水とメニュー表をおき、「お決まりになりましたらお呼びになってください」といい去った

新一は氷の入った水を一口飲む

「で、お話って何ですか？」

里香はメニュー表を見ながら聞いた

新一は

「自分でも何、聞かれていますのか自覚はあんだろ。」

ときつく言う

里香はフツと鼻で笑った

「ええ、今は冗談ですわ、毛利蘭にどうしてそんなにきつく当たるのか…ですわよね？」

腕を組み聞く里香

「わかってんじゃないか、理由を聞かせてくれ。」

と新一

里香はフンとそっぽを向く

「あなたに教えたって…意味ありませんわ。用件はそれだけですわよね？私、帰らせていただきますわ。」

里香は鞆を持ち、席を立とうとする
新一は再び腕をつかむ

「まだ話は終わってねえ…。理由を話してもらえるまで帰らせねえよ。」

里香の顔を見ないで言うと里香は大人しく座った

「あなた、何でそんなに私のことを聞きたがるんですの？ストーリーカ
ー？スパイ？」

「いいから話せよ。」

新一は睨む

里香は流石に真面目な表情に

「あなただけには敵わなかったようですね…。よろしいですね、私が毛利蘭にしつこく付き纏う理由…。

それは私の心の中にありますの、家庭の事情って言うものですね。御免なさい、家庭の事情だけは幾らなんでもお話することは出来ませんわ…。」

里香は真剣に謝る

「…そうか、悪かったな…。家庭の事情まで首突っ込んでしまったことはいけねえことくらい俺も知ってる…。」

悪かったな、如月。用があるなら早く帰ったほうがいいんじゃないか？

「じゃあな。」

新一が言つと里香は再び鞆を持ち、礼儀よくお辞儀をして帰っていった

里香は帰り道、目に涙をためながら帰った

新一は結局、あのあと喫茶店で一人で珈琲を飲み、帰っていった

里香は家に着き、レッスンまで自分の部屋で休んでいた

「何で工藤新一様はしつこいんでしょう…。毛利蘭にしつこく付き纏ってる理由なんて…。」
「言いたくありませんわ…。」

里香は顔を机に伏せたまま、時間までこうしていた

「里香様、失礼いたします、先生がお見えになりました…。」

里香専属の執事、萩谷がやってきた

「分かりました、有難う、萩谷さん。」

里香は少しの笑みでお礼を言うと部屋を出て行った

萩谷は布団を直すために部屋へと入った

布団を直していると、クシャと音がし、萩谷は探し、見つけた

見つけたのは1枚のしわくちゃの紙

「失礼いたします。」

紙をそうつと開く

萩谷は一通り見ると、目を丸くし、普段、余程のコトがない限り見せない涙を流した

里香はそんなことも知らず、レッスンを受けていた

Story 15 (後書き)

短かったです！が次回もヨロです！
おやすみなさい…

平成23年2/17 桜実保乃佳

Story 16 (前書き)

Story 15 と同日

最後らへん蘭姉ちゃん登場

里香はレッスンを終わるとすぐに自分の部屋へと戻っていた

「ふう、疲れましたわ……。は・萩谷さん!!!!」

里香は目を丸くし驚き、すぐさま萩谷の元へ行った

萩谷は咄嗟に紙を隠す

しかし里香にはそんな行動はすぐに分かった

「失礼いたします」と出て行こうとする萩谷の前に立ちふざがる

「萩谷さん……、見たんですの？持っている紙、内容を見たんですの！？」

里香が凄い勢いで聞くと萩谷は

「申し訳ありません！」

と深く頭を下げて謝った

里香はまるで奪い取るかのように紙を取るとクシャクシャにして近

くにおいてあったゴミ箱に投げた

「萩谷さん、お願い…一人にしてください…。」

里香が小さく言うと萩谷は「畏まりました、何かありましたらお呼びください。」といい、静かに行った

里香は思い切り、ベッドに伏せると大きい声を出して泣いた

萩谷は扉を閉めると、扉の前で小さく涙をすすっていた

＝ 里香 r o o m ＝

「うわぁぁーっ…、何でよ、何でなのよ！何でこんな地位の高い家に生まれなきゃいけないかったのよぉーっ！

私はただ普通の人間、普通の1人の地位の高くない女の子として
いただけなのに！

1番なんてどうでもいい、1番なんてならなくてもいい…だから
普通の生活を送らせてよ…！」

自分の気持ちを全部吐き出す里香、それしか方法がなかった

その言葉を扉越しから聞いてきた萩谷は我慢できなくなったのか
里香の部屋へと勢いよく飛び込んだ

「里香様…、もうやめてください!!!一人で抱え込まないでください、私がいいます。」

何かあれば何時でも相談に乗ります。お願いですから…。」

萩谷は里香を強く抱きしめた

里香は萩谷の胸の中で思い切り泣いた

そして落ち着くと「萩谷さん、いつもごめんなさい…。迷惑ばかり掛けてしまって。」と静かに謝った

萩谷は首を横にふり

「いいえ、大丈夫ですよ、相談等に乗るためにいるんです。何かあればすんなりとおっしゃってください…。」

出来ることは全てやります…。」

あ…、そうです、里香様、今度の週末にお買い物にでも出かけましょうか？

気分転換にいいと思いますよ!。」

と笑顔で聞く

里香は小さく頷き

「ええ、行きますわ。」

と笑顔で返した

「毛利邸」

「もう私、学校行きたくない…。」

蘭は一人、自分の家で体育すわりをするかのように蹲っている
小五郎は何も知らないため

「蘭、飯はまだかー？気分悪いのか？」

と蘭の部屋の前でずっと言っていたが、最終的には1人さびしくカツプラーメンを食べたという

蘭の体にはもう既に鬱病の症状が現れ始めようとしていたのだった

Story 16 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/18 桜実保乃佳

S t o r y 17 (前書き)

これで少しこの作品の執筆のお休みに入ります

Story 17

日曜日、蘭は園子と志保と米花デパートに気分転換もかねてショッピングに来ていた

また里香も執事の萩谷と一緒にショッピングに来ていた

蘭たちの3人のお目当ては服、今流行りの服が揃っているためだ

「えっと、あ、ココだよココー！あちゃー、結構客が入ってるわね

…、お目当ての服買えるかなあ…。」

と園子、確かに園子の言うとおり、行列が出来ている
園子の予想通りだった

しかし、志保は気にしない様子でスタスタと中に入っていた
蘭と園子も慌てて入っていた

店内は志保たちみたいに友達同士で一緒に買い物している人たちも
いる

恋人同士で来ている人もいた

志保は自分の好みの売り場へと行ってしまった

蘭は園子と一緒に好みの売り場へと向かった

「ねえ、蘭、この服、どうかなあ？結構にあってると思うんだけど……」

園子は自分の好きな服を見つけ、自分に似合うかと自分に服をあてて、蘭に見せる
蘭はただボーっとしてるだけだ

園子は少し黙り、自分の気に入った服をものある場所に戻す
そして

「ねえ、蘭、今日くらい息抜きしたら？ね？今日はパーっとね！
そら、この服とか凄く蘭に似合ってるんじゃない！？」

と元気付け、少し服を探しながら、似合った服を見つけ蘭に当てた
蘭は少し照れくさそうに笑う

園子もつられて笑顔になっていった

そのとき志保が自分の好きな服を持って蘭と志保の元へやってきた

「あら、蘭さんに結構似合ってるんじゃないかしら？その服。

園子さんはほしい服、見つかったの？」

と志保

園子は

「あつ、ヤバつ、服、みつけてないや！はい、蘭、これアンタのね
！」

といい、蘭に服を押し付けるように渡して自分の好きなコーナーへ
と走っていった

何とか自分のほしがっていたお目当ての服をゲット出来たらしい

会計を済ませ、まだ時間があったため少し服を見ていこうということ
となり3人で回っていた

そのときだった…

「…あら、毛利蘭さん、鈴木さん、そして宮野さん。」

「……如月さん……！」

そう偶然にも里香に出会ったのだ
里香は好きな服を選んでいた

その横には萩谷がいた

蘭は見た瞬間に震えだし、園子に自分の買った服の袋を押し付け、
その場を一目散に逃げるように去った

園子は「ちょ・ちよつと蘭！」といい、蘭を追いかけた

志保は少しその様子を見、里香と萩谷を見て小さくお辞儀をし、走
っていった

「また明日、学校で会いましょ。」

と里香の耳元で小さく呟いて…

里香はその言葉を聴いたとき一瞬、鳥肌が立った

「里香様、大丈夫ですか？少しお休みになりますか？」

「いいえ、大丈夫です、お気遣い有難うございます。あ、服、私、
自分で持ちます！」

「いえ、よろしいですよ、私がお持ちいたします。」

「ごめんなさいね。いつも…」

「お嬢様が責任を感じることはありません、私をいつでも頼ってくださいね！」

萩谷は笑顔で言うと里香は小さく頷いた

「蘭、大丈夫？」

蘭に追いついた園子と志保、近くの椅子に座って今は休んでいた

「ゴメンね、もう大丈夫…。」

「蘭さん、無理しないで、今日はもう帰りましょう？」

志保が聞くと蘭は小さく頷き、解散となった

園子は買い物があるといい、デパートで別れ、志保と蘭は途中まで一緒に帰っていった

志保は家に着くと、新一の家に行き、新一に出来事を話した

蘭は家につくとすぐに自分の部屋に入って、何もせず、ボーっとしていた

Story 17 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/23 桜実保乃佳

S t o r y 18 (前書き)

舞台は放課後　そしてあの2人がついに…

ある日の平日の放課後

蘭は、音楽室にいた

今日は吹奏楽の部活動がないらしく、誰もいなかった
換気の為に窓を開けている

さわやかで優しい風がそっと入り込む

蘭は静かにピアノ用の椅子に座る

風の影響でパラパラと楽譜がめくられる
めくられた楽譜のページを見ると、蘭がすぐに弾けそうな楽譜があった

ピアノの鍵盤にそっと指をのせて、弾き始める

蘭は弾いているうちに中に入ってしまった…

そう音楽の世界へ…

蘭は今、空の上で天使に見守られながら、天使に綺麗な音色を聞かせている

楽しそうにリズムにのりながら踊る天使たち

ポロンと音色が鳴り終わると天使は一斉に消え、また空から地上へ
戻る

シーンとする音楽室

パチ
パチ
パチ

小さな拍手が聞こえた

蘭は勢いよく振り向いた

そこにいたのは新一だった

「相変わらずピアノだけは上手いよなあ……。」

新一がドアのそばで言いながら蘭の下へと来た、蘭は椅子から立ち上がった

「ピアノだけってなによ、だって！」

蘭は怒りっぽく言うと新一は笑いながら謝った
クスリと笑う蘭、そして2人は笑いあっていた

「蘭、もう1曲弾いてくれよ……。」

新一が言うと蘭は「しょうがないわね、1回だけよ……。」とまるで
母親が子供に言うみたいに再び椅子に座った……

そして適当に楽譜をめくり、曲が決まったらしく弾き始めた
曲は…

「…アメージンググレイス…。懐かしいな…。俺らが中学生のとき
喧嘩して仲直りした曲…。」

そうアメージンググレイスだった

蘭は笑顔で頷くと引き続けた

今度は2人で音楽の世界へ…

再び現れる天使たち…

そう夢の音楽の世界の中では新一はヴァイオリンを持ち、弾いている

そして曲が終わると、元の世界へ戻った

そこへもう1つの拍手が…

そこには志保が…

「流石ね、蘭さん。工藤君はその彼女を見つめて鼻を伸ばしていた
の?。」

「バツ、バーク、なんなんじゃねえよ／＼／」

新一は顔を赤くする

「愛をはぐくむ時間を邪魔して悪かったわね、じゃ、また明日…。」

志保は少しの笑みを浮かべると去っていった

新一と蘭はまた顔を見合わせて笑いあう

まるで小さい頃みたい…

そして

2人は…キスをした…
蘭は顔を赤くしながらゆっくりと唇を新一に預けた

しかし1人覗いていた…

如月里香：

Story 18 (後書き)

やっと学期末テストが終わりました！

これからはできるだけ更新していきたいと思うのでお願いします！
次回もヨロです！

平成23年2/25

Story 19

里香は新一と蘭がキスをした場面を目撃してしまった
ホントはこんなに見えるつもりはなかったのに…

里香はグツと唇をかむ、ただピアノを弾きに來たつもりがこんな場
面を目撃してしまったとは
里香は、その場を後にした

怒りはMAXに達している

「…許せない…、あの女!!」

里香は爪を噛みながら、廊下を歩いていた

『…工藤君、蘭さん、気をつけて…』

なぜか里香の歩いてた場所にいた志保
志保はそう思いながら静かにその場を去った

里香HOUSE

里香は家にあるピアノを弾いていた
もう少しでピアノの教師が来る

それまでに練習しておかなければいけないのだ
しかし頭の中は新一と蘭がキスをしたところがずっと頭を回って上
手く練習できない

音を1音はずしたり、和音が不協和音になってしまったり…

バァーン

「何で上手くないかないのよっ!!何で何で!?!もういやですわ!!」

里香は思い切り、ピアノを殴りつけるように弾く

その大きな声を聞き、萩谷が入ってきた

「里香お嬢様、どうかなさいましたか!?!」

「は・萩谷さん、何でもありませんわ…、少しピアノの調子がおかしくて…。」

あ、調律ではないので大丈夫です…。あ、そろそろ先生がいらっしやるでしょう?」

お迎えしていただけません?」

里香が言うのと萩谷は「畏まりました。」といい、お辞儀をして、部屋を後にした

里香はフウトと一息つくと、再び鍵盤に指をのせ、弾き始めた
そしてレッスンも終了し、里香は自分の部屋へと戻った

里香HOUSE 廊下

「ハア…、今日の調子は全く駄目ですわ…、何もかもあの毛利蘭の」

「おお、里香ではないか…。」

「…お父さん。」

里香が歩いていると部屋から里香の父親、如月龍矢（きつきりゅうや）が出てきた
里香は父親に遭ったのも関わらず笑顔にならず、むしろ父親を見ると少し顔が曇った

「うむ、これから勉強の時間だな、頑張れよ、我々、如月財閥に生まれてきた以上は勉強にも励み、スポーツそして何でもこなせる人にならなければいけないのだからな…。」

頑張るんだぞ…。」

龍矢は里香の頭をポンと優しく叩くと、リビングへと向かって行ってしまった

「…待つてください…。」

里香は龍矢を止めた

龍矢は振り向き「何だね」と聞く

「…私、もうこれ以上耐えられませんわ…、私がこの如月家に生まれてきて楽しいと思ったことは1度もありませんわ。」

別にまだやらなくていい年頃…3歳、4歳から勉強をさせ、私が遊びたいといっても遊ぶ時間を作ってくれず、暇さえあればピアノの前に座らせ厳しい指導を受けさせた。

私は玩具としてこの如月家に生まれてきたんですの！？ねえ、ど

「うなんですのー!!」

「黙りなさいっ!!」

「…っ」

龍矢は里香の頬を叩く

里香は涙目で龍矢を睨む

「父親に向かつてなんだその態度は! いいか、如月家は勉強も何でもかんでも1位にならなければいかんのだ!

私だつてずっと子供の頃からお前みたいなお生活を送ってきた、しかし私は口答えも何もしなかった、だから今、こういう楽な生活が出来るんだ! もう私の前で二度とこんな口を聞くのではないぞ!!」

266

龍矢は怒鳴り、リビングへと向かった

里香は泣きながら自分の部屋へと戻っていった

「…いらぬわよ、権力も何も…、私の人生なのよ、父親なんか私の人生を決める資格なんてありませんわ!

私だつて…1人の人間なんですもの…。自分の人生くらい自分で決めますわ…。」

里香はそう呟くと、クローゼットから大きな鞆(蘭が入れそうなくらい)を持ってきた

そして何から何までものを詰め込んだ…

そして最後に自分の勉強机の引き出しにしまってある、ペンを取り出し、メモ紙を探し、見つけ、何かを書いて、ゆっくりと自分の部屋を大きな鞆を持って出て行った

そして誰にも気付かれないように、こっそりと、自分の家を抜け出していった

里香は夜の道を歩き続けた…
ずっとずっと…着いた先は…

工藤邸の隣の家だった…

Story 19 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年2/26 桜実保乃佳

里香は志保の家に行くか、新一の家に行くか迷ったが、志保の家に行くこと決めた

インターホンを鳴らし、誰かが出てくれるのを待つ
志保が出てきた

「あら、如月さん……。どうしたの？こんな夜遅くに……。しかもそんな寒そうな格好で……。」

風邪を引くわ、中に入って？」

志保が招くと里香は小さくお辞儀をして中へと入っていった
里香の部屋に負けないような大きさのリビング

里香は大きすぎるソファに座る、志保は里香に珈琲を出す
里香は一口コーヒーを飲み落ち着いたらしい

「ねえ、如月さん、変なことを聞くけどその大きなバッグの中には何が入っているのかしら？」

里香は

「聞かなくても分かりますでしょ？急で悪いのですが一時期だけで

よろしいですわ、私を匿ってほしんですの。

無理ならよろしいですわ…、迷惑を書けることはいけないことですから。」

と少しの笑みで答える

一息つく志保

「詳しい理由を聞かせてくれるかしら？」

と志保

里香は理由を話すことにした

「父と喧嘩をしてみましたの…。私はクラスの中では孤立しているのはお分かりですわよね？」

私は毛利さんを苛めていましたわ。でも心の中では毛利さんを苛めようなんて馬鹿なことは思っていませんでした。クラスの中で1番優しい毛利さんを苛めたら私はもつと周りから非難されますわ。でも父親が何でもかんでも如月家に生まれた以上、何でも1番でなくてはいけないという信念を持っていました。

でも私は1番なんてどうでも良かった、ただ楽しい生活を送りかっただけ…。

だからもう権力とかどうでもよくなって馬鹿馬鹿しくなって、家を出てきてしまいましたの。

私、毛利さんに謝りたいんですの。でも誤解されて…、毛利さんの席に行くと鈴木さんや新一様に怖い目で睨まれてしまいます、それを恐れてずっと彼女のそばへいけなかったんです。」

里香は泣いてしまった

志保は話を聞くとティッシュを持ってきて里香に差し出した

里香はティッシュを一枚引っ張り出し、上品に鼻をかむ

そして近くにあったゴミ箱を見つけ、ティッシュの紙くずを捨てた

座りなおす里香

里香は長々と話し続ける

志保は延々と聞いていた

話し終わるともう夜中の9:30を回っていた

「……って訳ですの。宮野さん、私、どうすればいいんですの？もう自分が何をしたらいいかわからないんですの！！

自分が今、どこにいて、何をしているのか分からないんですの！」

「それを言えばいいのよ。今、貴女が言った気持ちを工藤君に伝えれば……。

彼もきつと納得してくれるはず。」

志保が里香の元へ行き立って言う

里香は志保を見上げるように見た

志保は小さく頷く

里香はソファから立ち上がった

「有難う、そして御免なさい、宮野さん。私、工藤君のところへ行って来ますわ。」

里香は小さくお辞儀をし、リビングを後にした

志保はその姿を見送ったが…

「ところでどうすればいいのかしら、荷物…。」

志保のすぐ真下にある荷物を見ていった

結局、志保は重い荷物を、地下の実験室まで運んだ
そのおかげで志保は肩を請ったという（後日談）

「…「コ」ですわね…。」

里香は今、工藤邸の前にいる、深呼吸繰り返し返す里香
インターホンを押す

しかし返事がない

もう1度押す
すると

「はい、どちら様？」

と眠そうで重苦しい声が聞こえる

「新一様？如月里香ですわ。少しお話がありますの。真面目な…。」

丁寧に言う里香

新一はその言葉で一気に態度が変わった

「ああ、今開けっから待ってる。」

と強く堅苦しい声が聞こえてきた

里香は新一に言われたとおり待っていた

新一はすぐに来て、門を開け、「入れよ」と里香を招く
そして里香はリビングへ

新一は「珈琲いれてくつから待ってる」というが里香は「いいえ、お構いなく。」と珈琲を拒否した

「そうか」と新一そしてソファーに座る

「んで用って何だよ。」

と新一

里香は志保にいったみたいに自分の気持ちを言った

新一は「事情は分かった」と頷いただけで他に何も言わなかった

里香は結局、すぐに帰ってきた

そして今晚は、志保の家に泊まることになった

Story 20 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/1 桜実保乃佳

S t o r y 2 1 (前書き)

S t o r y 2 0 の次の日です

Story 21

次の日

里香と志保は朝食をとり、鞆を持ち帝丹高校へと向かう準備をしていた

博士は野菜ばかりの朝食を1人寂しく食べている

そして博士の目の前には1枚のメモ用紙がある

それは…

ダイエットメニュー

志保が厳しく書いてあるメモ用紙を見つめる博士
内容は

今日のメニュー

- ・ジョギング往復10キロ
- ・腹筋・筋トレ等を50回ずつ

・暇があれば散歩もかねて食材を買いに行く

と書かれている

まで時間がないだけましであろう

博士はいつまでも見つめながら「わし、肉が食べたいのぉ。いつになつたら食べれるんじやろ…。」と小さく呟いていた

新一と合流し、挨拶をしあう3人
里香はオドオドしながらも挨拶をした

新一はもう今まで接していた態度が変わった

「おっす、如月」

と普通に挨拶してくれた

里香は目を丸くして喜んだ

一同は毛利探偵事務所へと向かった

一方蘭は…？

自分の部屋で制服を着て、1人で朝食をとっていた
そして朝食をとり終え、食器を流し台に置くき、リビングに再び戻ると、鞆の持ち手を強く握った

そして深呼吸

落ち着いた蘭はドアノブを回そうとする

しかし…

「…どうしよう。また苛められちゃうのかな…。それなら行きたくないよ…。」

と手に力が入らない

そのとき

「蘭

っ!!」

と大きい男性の声が聞こえた

蘭は、窓を勢いよく開けた

「…新一？」

蘭に気付くと新一は大きく蘭に手を振った
その横で志保はニコリと笑顔を浮かべてる

そして更に志保の隣には

「…里香ちゃん？」

如月里香がいた

しかしいつもの雰囲気ではないと蘭はすぐに読み取った

蘭は小さく手を振り替えし、再び靴を履いてドアノブを回した
階段を緊張しながらも一段ずつ下りていく

そして降りた先には

「蘭さん、お早う。」

「蘭！オッス！！学校行こうぜ！」

「…お早うございますですわ…。も・毛利さん。」

仲間の笑顔があった

蘭は里香の行動に一瞬目を丸くしたが笑顔で皆に

「おはようっ！新一、志保さん、里香ちゃん！」

と満面の笑みで挨拶を返した

3人は少しの間、目を見合わせて笑っていた
しかし…

「ああーっ！もう5分でHR始まっちゃうぞ！」

と新一がつけていた腕時計を見ながら大きい声で言う
蘭は戸惑っている

志保は冷静を保っている

里香は…

「…萩谷さん、大至急ですわ、車で送ってくださいませんか？」

と携帯みたいな通信機を取り出し、萩谷へと連絡
萩谷は「了解しました」と了解し、すぐに車に乗って走ってきた

「さ、早く乗ってくださいですわ。」

里香が招くと新一たちはお辞儀をして乗り込んだ
何とかHRギリギリ…

教師にもこっぴどく叱られなくて済んだ

里香は休み時間、蘭の下へ行き、全てを話そうとし、蘭と新一と志保と園子を屋上に呼び出した

屋上で里香は事情を話し、皆に謝った

蘭は里香に抱きついた

里香は驚いていたが蘭にもたれるように力を抜いた

Story 21 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/2 桜実保乃佳

里香が蘭たちと仲良くなってから、里香は蘭たちと一緒に行動するコトになった

里香は、入学当初に一緒にいた友達とはあまり遊ばなくなり、むしろ蘭たちと一緒にいたほうが楽しいと心から思っていた
しかし、里香にも心の隅で悩んでいたことがあった

それは親との関係だった

里香が志保の家へ阿笠邸に逃げ込んだ日から1度も親に連絡を取っていない

しかし、親が携帯に電話を掛けてくることもなかった

里香は「もう自分には必要のない小娘」とずっと持っていたため然程気にしてはいなかった

しかし志保の家になんとお世話になるのも時間の問題
いい加減に迷惑を掛けるのも無理がある

里香はある決意をした

阿笠邸 リビング

「あの、志保さん、私、この家をそろそろ去ろっと思ひますの。」

散々お世話になりましたし。

これ以上迷惑を掛けるのはと思ひまして…。お世話になりました。

」

リビングで静かに言う里香に志保は目を丸くした、何故か阿笠邸にいる新一も目を丸くする

志保の第一声が…

「……………は？」

という裏声のような声

里香も「……………は？」と言葉を返すしかない

新一も固まっている

「いや、あのだから、何でいきなりそんなことを言い出すのかしら
と思ったから。」

志保は入れていた3つ珈琲をお盆に載せて聞く、新一も同じく頷く
そしてリビングに置き、里香は珈琲を飲んだ

「ですからこれ以上迷惑を…」

「飯に出て行ったとしても、貴女は普通に家へ帰って”お父さん、お母さん只今戻ったわ”といつもどおりにいえるかしら？」

それが出来ないのならこの家を出て行ったとしても貴女を匿ってくれる家はないわ。

毛利探偵事務所に行くとなったら大変な騒ぎが起きるでしょうね。多分。週刊誌のネタは毛利探偵事務所に如月財閥の礼讓が家出！なんていう記事を書き上げられてこのネタで持ちきりになるかもね。

大袈裟だけど貴女はそれを覚悟の上で言っているのかしら？」

志保が言つと里香は言葉に詰まる

「でもこれ以上ご迷惑を」

「貴女は迷惑迷惑というけれど迷惑と思っているのは貴女だけなんじゃないかしら？結構、有難かったのよ。」

博士のダイエツト作戦に協力してもらったり…まあ、貴女は私たちにとっては迷惑じゃないってコトよ。」

「宮野、それ微妙にフォローになってねえぞ。」

静かに横で突っ込む新一

志保はチラリと新一を一瞬睨んだがすぐに里香のほうを見た

里香はしばらく黙っていた

「…では…本当に迷惑ではないのならもう暫くココに居候させていただいてもよろしいですか？」

と里香

志保は小さく頷いた

「ええ、また宜しくお願いね？博士のダイエット協力とその他諸々。」

新一は再び苦笑し、こう静かに突っ込んだ「だからフォローになつてねえ」と…
その時…

ピンポーン

インターホンがなった

志保は「どちら様かしら」と呟き、玄関へと向かった

里香は立ち上がっていたがソファに腰を下ろし、珈琲を飲み始めた

飲んでいると玄関先からこんな声が聞こえた…

「おいつ！里香、いるのだろう！？こんなトコにいないで家に戻れ
！！」

如月家がこんなところで油を売っていたら世界中から如月家を応援してもらってる人になんと説明したらよいのだ！！恥だ！！」

と…、これは里香の父親の怒鳴る怒りの声だった

里香は一気に硬直

新一はゆっくりと立ち上がり、玄関へと向かった

里香もゆっくりとおびえながらも玄関先へと向かう

一方玄関

「いいから落ち着いてください!！」

懸命に止めている志保

しかし父親には聞こえていない

まだ取り乱している

しかし里香が見えると…

「里香! 帰るぞ! 如月家の娘は勉強に励み…」

志保の手を振り払って靴を脱ぎ、スタスタと里香の前へと行き、強引に腕をつかむ
しかし

「もういい加減にしてくださいっ!!!」

里香は父親の手を振り払った

父親は目を丸くしながら手を押さえる

里香の目には涙が溜まっていた

「私はもう勉強だろうが1番だろうが何でもいい!!!!どうでもいいんです!私は貴方の玩具ではありません!

権力も地位も要りません!もうこんなに追い詰められてるんです!!!!」

里香が泣きながら服の袖をまくった

流石の志保も新一も驚いていた

里香の腕には、自傷行為の跡が残っていた…

父親は里香の手を見ると…絶句した…

里香はその場に崩れ落ちた…

Story 22 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/5 桜実保乃佳

「…里香、お前は如月家の娘の癖になんということを…」

父親はカンカンに怒っている

里香は父親の顔を１ミリたりとも見ようとはせず、リビングへと向かった

父親は強引に志保を押しつけて室内へと入ろうとする
とうとう父親はリビングへと入って行ってしまった

しかし里香はいなかった…

「おい里香！！どこへ行ったんだ！出てきなさい！！早く家に帰るんだ！！」

叫ぶ父親、しかし、里香の声は聞こえてこない、それどころか物音も聞こえない

志保は不思議になり、部屋を探し始めた

新一は父親の見張り

志保がリビングを出て行ったと同時に聞こえた音

ドサ

新一と志保は音の聞こえたほうへと向かった

「如月（さん）！！」

新一と志保は同時に名を呼んだ

里香がベランダらしきところから落ちてきたから

窓を勢いよく開け、里香に駆け寄った

額から血が出てきた

志保はリビングへとすぐに向かい、電話を取り119番通報
救急車はすぐに来て里香は病院へと運ばれた

米花中央病院

手術中と書かれたランプがチカチカと赤く照らされている中、里香は手術を受けている

新一と志保は手術室前の椅子に座っていた

父親は落ち着きがない

「…ったくなんというコトをしでかしたんだ、如月家の娘の癖に…。」

志保は父親の言葉を聞き、堪忍袋の緒が切れたらしい

「1つ以上言わせてもらうわ、貴方の口からは娘が怪我をしたのにも関わらなく如月家のコトしか頭がないようね。如月さんはずっと追い込まれてたのよ。貴方のせいだね!!」

少しは娘さんのコト考えてあげたことはあった？

誕生日もろくにお祝いもされなく、暇さえあれば休息の時間も上げず勉強、精神的にも疲れていたでしょうね。それ+何でも1番でいけないという重圧プレッシャーもあるわ、貴方は娘のコト少しでも考えてあげていた？

もしも考えていなかったのなら最低ね、親の風上にもおけないわ。

と睨む志保

父親は下唇をかむ

丁度そのとき、ライトが消えた

里香に続いて、執刀医が出てきた

「手術は成功しました。あとは本人の体力回復でしょう。入院期間
は長くて4週間、短くても3週間くらいで退院できるでしょう。」

執刀医は頭を下げ、去った
父親は執刀医に頭を下げた

新一と志保は里香の病室へと向かった
なぜか父親は来なかった

里香の病室（個室）

志保と新一は椅子に座る

里香は酸素マスクをつけて眠っていた

寝ているときの顔が1番幸せそうだった
そのとき扉が開いて蘭が入ってきた

「里香ちゃんは大丈夫!？」

志保は立ち上がって蘭の元へ行き、容態を説明、蘭は安心した表情
になった

3人は一晩中里香のそばについていた

Story 23 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/7 桜実保乃佳

里香はベッドで寝ている中、夢を見ていた

夢の中

「…ココは…どこですか？」

里香の前にあるのはどこまでも広がっている野原
進んでも進んでも野原が広がっている」

よく見ればお花が咲いていたり、お花の蕾があったり…
進んでいくと木で出来た可愛いブランコがそしてそのそばに大
きな門みたいな扉がある

里香はブランコに乗る

ゆっくりとブランコを揺らす

優しくゆれるブランコ、そして吹く風

しばらくブランコを揺らして遊ぶと今度は気になっていた門みたい
な扉の前に近づいた

「…この先には何があるんですか？」

ギィ…

「キヤアーっ!!」

里香がゆっくりと門を開いたと思ったら一気に落下
悲鳴を上げるのは当然のこと

しかし、死なずにすむことが出来た…

「わぁーっ!!」

フカフカとやわらかい虹の上に乗った
そして勢いよく滑り始める

里香は自然に笑っていた
しかし…

「キヤアアア っ!!」

里香が見た先には虹が途切れていた「先がないつまり、落ちてしま
うというわけだ

里香が目を瞑った瞬間、ガラリと変わった

目の前には大きなケーキ、そして里香はドレスを着ていた
目の前にはプレゼントがいっぱい

そしてあちらこちらから「里香様おめでとつございます!!」とい
う声が絶えない

里香は状況が飲み込めず、キョロキョロと辺りを見回し、萩谷を見
つけ

「…これって何のパーティなんですの?」

と小さい声で聞く
萩谷は驚いたように

「何をおっしゃられているのです?今日は記念すべき里香様のお誕
生日ではありませんか!!」

と元気に明るく言う

里香は全く分からず首を傾げた

しかし父親が出てきた

「皆様、今日はわが娘里香の、誕生日パーティにご来場いただき有
難うございます!」

わぁーっと拍手、里香は一応、演技だがドレスのスカートのすそを
つまみ礼をした
再び拍手

そして誕生日ソングを歌い、盛大に祝された

誕生日パーティも終わり、客が帰っていった
里香は父親に呼ばれ父親の部屋へ来ていた

父親の部屋

「お父さんなんですの？私の用とは…。」

父親はソファーに深く腰掛けた

「ああ、今まで私は里香の気持ちに気付いてやれなかった。悪かった。」

もうこれからはきさらぎけの人間としてという自覚なんかを待たなくてもいい。

勉強もしなくてもいい！里香の好きにしてい！私からは以上だ。下がりなさい。」

父親は明るく言うと、里香に背を向けた
里香はお辞儀をすると部屋を後にした…

『お父さんじゃない。お父さんはどうしてしまったの？でもこの嬉しいと思う複雑な気持ちはなんですの？』

と里香は自分の部屋へと向かいながら思った

現実

「…は！」

里香は目を覚ました
新一と蘭は肩を寄せ合い眠っていたが志保は起きていた

「お目覚め？今、医者を呼んで来るわ。」

志保はその場を去った

里香は辺りを見回す

父親の姿はどこにもなかった

医師が来て、診察をして病室を後にした

「宮野さん、私、夢を見ましたの。最後の夢にお父さんが出てきて……。なんだかいつものお父さんとは違うみたいで……。勉強に励めというお父さんが勉強をしなくてもいいとか、

暇さえあれば休息をとらず勉強しろとっていたのにもう好きなことをしていいとか……。

ほんとに全然とっていいほどの別人でしたわ。」

と呟くように志保に言う里香

志保はただ黙っていた

暫くして志保は口を開いた

「……ねえ、如月さん。今の話を聞く限りそれは貴女の願っていることなんじゃない？」

いつも勉強をしなくてはいけないという重圧プレッシャーを逃れたくて……。

開放されたいというそんな気持ちから夢が生まれてきたんじゃない？」

と志保

里香は暫く考えて「そうかもしれないわね」と頷いた

Story 24 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/8 桜実保乃佳

Story 25 (前書き)

遅くなつてごめんなさいm(____)m
短いと思いますがどうぞ……！

里香が入院してから早くも2週間たった
時の流れは早いと感じる里香

病室の窓から見る景色は自分の家から見る景色とはまた違って風情
のあるものとは感じられない

5日たった今も、父親は顔を見せてない
ただ…

里香が起きているときだけ

その夜、里香は眠れなかった、少しでも早く眠りにつけるようにと
枕元にある本を手に取ったがもう読破してたため、意味がない

布団にもぐりこみ「眠れ眠れ」と呟くように連呼する里香
しかしなかなか眠れない

途方にくれる

病室にある時計を見ると22:45をさしている
とつくとーに眠ってしまっている時間

そのとき

スー

「…誰ですの？」

目が覚めてしまった里香

「里香、起きていたのか。」

父親だった

父親は椅子に座る

「何で居間みたいな時間に来たんのですの？」

布団から起き上がる里香

「いや、久しぶりにお前の寝顔が見たくなっただけ。」

これお見舞いとリンゴをおく

「あの、1つお聞きしたいことがありますの。夢の中でお父さんが出てきましたの。」

私が誕生日の場面だったのですわ。お父さん、私にこういつてましたの。」

如月家の人間だということをお忘れのいいとか勉強なんかしないで自由にしてい

と。確かに夢の中でこうおっしゃってるんです。お父さん、変なことを聞きますが私がこの夢を見ていたときにお父さん、この部屋へこられましたか？」

と里香

父親は少し黙っていた

「ああ、確かに来た。お前へ、無理しなくていいとも言った。」

と父親

里香はやっぱりというように頷く

「何で何のですの？何でいきなり甘やかすのですの！？それなら最初からこうすればよかったのではありませんの！？」

何で私がこうなったからって甘やかすんですの！？」

怒ってしまった里香

目には涙が溜まっている

父親は少し顔を下に向ける

「この前な、お前の友達の1人にこういわれてしまったんだ。「父親の風上にもおけない」とね。

だから今までできてきたことが凄く馬鹿げたことをしていたと思った。すまなかった。」

父親はひざまずいた

里香は思い切り目を丸くした

「やめてください!」

ベッドから降りる里香

父親は顔を上げなかった

何とか父親に頭を上げさせたが父親はそのまま後ろを向いて帰って行ってしまった

里香は去っていった父親の後を見つめていた

1週間後、里香は無事に退院した

すぐに学校に復帰

授業が進んでいたが高校3年生レベルの問題もすらすら解けるため問題は無い

問題は友達関係だった

里香は蘭たちと仲良くなり、ともに行動し始めたが周りの視線が痛いそれに園子は1回も里香のお見舞いに来てない、それどころか里香がベランダから落ちて怪我をして入院していたことすら知らなかった

「蘭、アンタ、いつの間に如月さんと仲良くなったのよ。」

確かに里香の事情は園子も知っていたが大して理解をしているわけではなかった

むしろまだ理解を出来ないという感じでよく思っではなかった

里香は園子ともいい関係を築きたいと思っていたが、園子が一方的

に里香のコトを良く思っていないため無理やりすると余計に関係が
メチャクチャになってしまう

仕方なく里香は園子のみを屋上に呼び出したが園子は来なかった

Story 25 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/15 桜実保乃佳

S t o r y 2 6 (前書き)

季節は過ぎて、初夏になります！＝ 6月初旬くらいです

日が段々たつて、初夏。

里香と園子の仲は相変わらず変わっていない

蘭は早く里香と園子を仲直りさせようと思っているが上手くいかない

「あの、そ・園子さん…。」

里香が園子のコトを呼んでも

「何よ！友達でもないのに、そんな園子さんなんて軽々しく言わないでよね！…」

と昔の里香状態である

里香はもう諦めかけている

園子は里香に自分がやった同じコトをしているのだろうか

休み時間に、里香が蘭の机に行くといつも園子も来るのだが最近、来ない

里香を相当嫌っているのだろうか

いつも蘭たちは園子と里香のやり取りを見る度に苦笑している

3連休、蘭は志保と里香と園子を誘ってショッピングモールへ…
園子は里香がくるとは知らず、また、里香も園子が来るとは知らな
かったため2人は待ち合わせ場所に着いたとき、驚いていた、里香
はオドオド、園子は里香を睨んでいる

蘭は「まあまあ」ととめている

志保は「馬鹿らしい」という風に横で欠伸を1つしていた
そしてこう呟いた

「蘭さん、この作戦は失敗に終わるんじゃないの。」と

蘭は更に苦笑「やっぱり失敗だったかな」と呟いた
そしてショッピングモールへと入っていく

ショッピングモール

「園子、里香ちゃん、どこ行く??」

蘭は場の雰囲気盛り上げようと明るく言っが

「あ・あの、新商品が入荷したというあそこの服やに行きたいです。」

「やっぱりそこでしょう!」

「「あ」「」

意見が真っ二つ

里香と園子は顔を見合わせる

「…いいわよ、如月さんの行きたいところで!」

「あ、園子さんのお好きな場所で…。」

2人は互いに譲り合う
しかし

「何よ、アタシが譲ってあげてんのよ！如月さんの行きたいところ
に行きなさいよ！！」

と園子が譲って止まらない

里香は強がっていたが性格は引つ込み思案で涙もろいためもう半べソ

里香はその場から走って行ってしまった

「里香ちゃんっ！！」

蘭は追いかけてようとするが園子に腕をつかまれ

「いいのよ、如月さんなんて放っておきましょうよ！！それより、
その服屋、凄く可愛いのが入ったんだよ！！蘭に絶対似合うよ、
志保さんのもね！さ、行くわよ！！」

と強引に店内へと入って行ってしまった

何とか買い物が終わり、3人は昼食を取ることに近くのカフェに入った

とその前に…

「里香ちゃん、探しに行かなきゃ…!!」

蘭は鞆を持って里香を探しに行こうとしたが、またもや園子に腕をつかまれた

「何で、アンタは如月さんをかばうのよ!!あんなに酷いことをされたのよ!!許さなくていいじゃない!」

と園子

蘭は下を向いて少し考えた…

志保は黙って蘭を見ていた

「確かに私は里香ちゃんにたくさん、酷いことをされたよ。でも里香ちゃんはちゃんと謝ってくれた。

それに里香ちゃんは私の大事な友達なんだもん!!」

と蘭が強く言っていると園子は言葉につまりつかんでいた腕を放した

「そう、もう勝手にしなよ!アタシは如月さんとは仲良くするつもりはないから!!」

園子は座っていたベンチから勢いよく立ち上がり、そそくさと蘭たちの場からいなくなった

蘭は「園子」と名前を呟いたが

「志保さん、ここで待ってて、私、里香ちゃんを探しに行ってくる
!!!」

といい、かばんを置いて、里香を探しに行った

志保は「あ・そ、ってらっしやい」と素っ気無く言つと再びメニューを見て珈琲を頼んで飲んでいた

Story 26 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/18 桜実保乃佳

Story 27 (前書き)

最近、里香が書いてて自分でも「面白いキャラ」と思い始めてきた
…。

しかも最初と今のキャラが違いすぎるし(笑)

変だと思ったら…作者まで…(苦笑)ノ

園子はショッピングモール店内をウロウロと彷徨っていた
ほしい服を見つけても買う気になれない

それだけではない、里香のコトばかり気になってしまう

本当は里香の気持ちは自分にも理解できている、ただ素直になれない
誤って握手をすれば友達にだってなれる、そう園子は思っていたの
に…
里香にも前だどついついきつくなってしまう

大好きな親友を苛めたというのも1つの原因だろう、しかし当の本人は里香とすっかり打ち解けようとしてしまったのだ
志保も友達ほどではないが普通に接している、接していないのは自分だけだ…

新一も蘭と仲良くするようになってからは普通に接していたのだから…
足元をただ見ながら歩く…、楽しいショッピングモールに来て思い切り服を買い込もうと思っていたのに…
これでは全く駄目である

そのとき、足元に見覚えのある靴が見えた

園子は顔を上げた

「…如月さん…。帰ったんじゃないの…。」

里香とばったり会ってしまった

里香も目を丸くし、かつ、少しおびえるような目で園子を見つめた

少しの間沈黙の時間が続いた

「あのさ…、ゴメン、さつきは…。」

園子が里香に謝った

里香は少し下に向けていた顔を、あげて驚いた

「あっあのっ、園子さんが悪いわけでは…むしろ謝るのはこちらですうっ!!！」

馴れ馴れしく園子さんなって呼んでしまっ…。まだ友達でもなんでもないのに…。

あ、の、ゴゴゴゴメンなさいっ!!！」

深々と頭を下げる里香

園子も慌て始めた

「あ、あの、今まで散々ひどいこと言っ…といてこんなコトというのはあれなんだけど…、アタシと友達になっ…てくれない？志保さんとも蘭とも仲いいのにアタシだけ仲悪いっ…ていうのも何か寂しいじゃない!!！」

工藤君とも仲良くなっ…ちゃってるしな…。」

手を差し伸べて「握手」という感じの園子
里香は慌てて手を出し、「握手」

「はいっ！喜んで！園子さん！！」

満面の笑みの里香

園子も釣られて笑顔に…

丁度そのとき…

「オメーら何やってんだ、こんなトコで！危険だからこっから逃げろよ！！」

新一が現れた…、しかも凄く焦っているような感じが見てわかる

「工藤君こそ何やってるのよ、息切らして…。」

目を丸くしながら聞く園子
まあ第一に、ファッションセンスのない男が1人でショッピングモールをブラブラしていたら誰だって何をしているのだろうと思うだろう

里香は首をかしげているような感じな顔
実際は首を傾げてないが…

「ついさっきココの入り口付近で捕まった男が警察の手を振り払ってココに入ってたんだよ!!」

男はナイフと拳銃を1つずつ所持してっから今、この中に入ってる買い物を避難させるように呼びかけてんだ!だからお前らも早く逃げ…」

「工藤君!!」

新一が説明していると志保が来た
警察に呼びかけられたのだと推測できる

「宮野もいたのか…、まあ、いい、早くこっから」

「逃げては駄目です!!蘭さんがまだこのデパート内にいるんですっ!!早く見つけて一緒に避難しないと蘭さんは危険です!!」

「何だって!?!」

里香の言葉に新一は更に驚いた

「貴方たち蘭さんにあってなかったの!? てっきりあったのかと思っただけど…。」

と志保

「私たちを探してくれていたんですか！？大変です！！早く蘭さんの下へ行かねばっ！！」

里香は荷物を置いて、蘭の元へ向かった
慌てて新一そして志保が追いかける

園子は何とかせねばと思ったが、皆の荷物を守らなければいけなかった

そのため待機となってしまった…のではなく

「待って!!!!」

と荷物を置き去りにして皆の後を追った

「里香ちゃん……いたら返事して……！」

蘭

蘭は階段を下りたり上がり上がりしたりしながら里香を探していた
そして同時に園子も探していた

しかし見つからない

蘭は一旦、志保のいるところへ戻ろうと引き返そうとする

「はあ…はあ…」

荒い息が聞こえてきた
振り向く蘭

とにかく人の多いところへ行こうと上りかけていた階段を下ろうと
下り始めた

しかし段々その荒い息の音は近づいてきたように大きくなっていく
怖くなったのか涙目になっていく蘭

走れる限りのスピードでものすごい勢いで階段を下る
やっと近くの階に到着し、人の多いところに出れたと思った瞬間

「え…誰もいない…」

人が避難したあとだったからか人はいなかった
いたのは見回る警備員だけ

蘭は近くで巡回している警備員を呼び止めた

「あの、ここで何があつたんですか??」

不安そうに聞く蘭

「君、こんなところで何をしているんだ!!逃げなさい!!怪しい男がいるかもしれないんだぞ!!」

警備員は蘭の腕をつかむと安全なところへ誘導しようとする

蘭は驚いたが一刻も早く避難せねばと思い、警備員にお礼を言つて店内の出口へと向かつた

しかし、蘭は方向音痴のため道に迷つてしまった

警備員が本来いるであろうところへ行つても警備員は巡回のためかいない

蘭はこうなつたら自力で出るしかないと思ひ始め出口を見つけようと再び階段へと向かつたとき…

「…っ!け・拳銃…っ!!」

怪しい男を見てしまった

幸い男は蘭に気付いてなかつたため蘭はほつと一安心

ゆっくりと男に気付かれないように足を回したそのとき…

キユ

「ん？」

蘭の革靴の音が響いてしまった

男はくるりと振り向く

蘭は咄嗟にどこか隠れるところはないかと探す

何とか見つけたと思ったが男は近くにまで来ていた
必死になってバッグから携帯と取り出し志保のダイヤルをプッシュする

『お願い、志保さん、早く出て…』

蘭はずっと祈り続けていた

新一、志保、園子、里香

「蘭さん、どこですかあっ！返事をしてください！！」

里香が気付かれないようにかつ蘭に聞こえるように呼ぶ
しかし聞こえてない

「このフロアにはいないみたいね、上の階を探しましょう。」

~~~~~



志保の携帯の着メロがなり始めた

「もしもし…」

志保はボタンをプッシュし電話に出る

「…もしもし、蘭だよ、お願い、急いで5階に来て…、犯人がいるの…！拳銃持ってて怖いよお…。」

「蘭さん！？わかった、いまそ…」

「大丈夫か、蘭…！今行くから待ってるよ…！」

志保の携帯をとり電話に出た新一

「新一…、わかったお願い、はや…」

ツーツーツ

「おい、どうした蘭！？応答しろ…！」

蘭

突然電話が切れた

「よお、讓ちゃん、ふざけたまねをしてくれたな…。」

犯人に見つかってしまった

「あ、ああ…！はああああああああつ…！」

蘭は得意の空手で犯人を倒そうと考えたが犯人は反射神経が鋭いのか簡単に蘭の技をかわしてしまった

蘭は驚き、何回も繰り返し返したがやはり駄目

「はあはあ…。」

息切れをする蘭

「もう終わりかあ…。それじゃ、今度はコッチの番だぜつ…！手加減はしねえ…！」

パシユツパシユツ

「…くつ…。」

蘭は男の発砲した銃弾で腕と頬をかすった

舌打ちをする男

「今度こそ決めてやる…っ！！」

腕を押さえる蘭

男は狙いを定めて引き金を引こうとする

そのとき

「はあっ！」

蘭は男に突進し、男を突き飛ばし、逃げていった

男は倒れたがすぐに起き上がり待てと怒鳴り蘭を追っ駆けた

蘭は今度こそ上手く隠れ息を潜めていた

腕から出てくる鮮血

蘭は気を失った…

一方新一たちは蘭の言葉を手がかりに蘭を必死で探していた

Story 27 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/21 桜実保乃佳

Story 28 (前書き)

感想等待ってます

「らぁーんっ!!」

新一は必死に蘭がいるといった5階を探す  
志保も里香も新一同様必死に探している

園子は何かあったときのために警察を呼びに行った

「いたわ!!蘭さん!？」

志保が蘭を見つけた  
蘭は気を失っているためぐったりとしている

新一は志保の下へすばやく行き蘭を抱き上げる

「蘭!蘭!大丈夫か!？」

呼びかける新一

蘭は気を失っているため一向に目を覚まさない

その横で志保は脈を取っていた

「大丈夫、息はあるわ。ただ気を失ってるだけみたい。」

冷静になった志保

新一も安心したらしく一息ついた

その後ろで里香がオドオドしている

「あの、蘭さん、大丈夫ですか？腕と頬から血が出てますけど…。  
私、絆創膏持ってます…。」

里香は新一に絆創膏を渡した

新一は絆創膏を蘭の頬に張った

「警部さん！！ココよ！！」

園子が目暮警部を呼んできた

警部は救急車を呼び、救急隊員はすぐに来た

蘭はたんかに乗せられ救急車へと運ばれていった  
新一らも付き添うが…

「私、犯人に蘭さんの敵をとってきます！！」

里香はそういうと走って行ってしまった

「如月待てっ！！」

新一は追いかけた



しかし里香は相当足が速いのか新一は追いつかない

知らぬ間に里香を見失ってしまった

新一は携帯で警部に連絡し、何人か警察の応援を頼んだ

## 里香

里香は必死で犯人を探している

しかし見つからない

「ドコですの…。」

息切れしながらも走る里香

「…いました!!」

里香は犯人を見つけたらしい、犯人は里香に気付いてないらしく、  
ウロウロしている

里香は気付かれないように犯人に近づいていく

静かにそつと…気付かれたら一巻の終わりだ

「…はあああーっ!!」

犯人に飛び掛る里香

「うわっ！何だお前は!!」

見事犯人は里香の下敷きになった  
拳銃もどこかへ吹っ飛んだ

「よくも蘭さんを拳銃でやってくれましたわね!!今度は私が貴方を…っ!」

里香は吹っ飛んだ拳銃を拾って犯人に向ける  
犯人に向けられた銃口

「…やめろやめてくれえっ!!」

犯人は必死で頼む

里香は止まらない  
そのとき

「見つけたぞ!!」

警察の応援と新一が来た  
里香はその拍子に拳銃を落とし、ガタガタと震えだした

まあ、自分の中では無意識に拳銃を犯人に向けていたということなのだから…  
犯人は無事に逮捕された

里香も皆の元へ戻った

蘭がいた

「蘭さん、腕、大丈夫ですか？」

蘭の腕を見て聞く里香  
蘭は笑顔で

「大丈夫よ！このとおり！！有難う里香ちゃん。私のために犯人捕まえてくれて…！」

と里香に抱きついていった

Story 28 (後書き)

あっさり終わってしまっ御免なさい。今から学校なので急いで書き上げました…。  
次回もヨロです！

平成23年3/23 桜実保乃佳

Story 29 (前書き)

ココから終盤に近づけていくつもりです

ショッピングモール事件かの次の日、帝丹高校、21B

「お早うございます、工藤君。」

里香は席替えをしても新一の隣になったらしい、かばんを置き、伏せている新一に挨拶をする

新一は顔を上げて「んあ？如月か…、はよ。」と重苦しそうに挨拶をする

里香は小さく微笑むと少し気分よく園子と志保の席へと向かった

園子と志保は席替えで隣の席になった

「園子さん、志保さん、お早うございます!!」

爽やかにそして元気に挨拶をする里香

園子と志保も挨拶を返す

「あの、お2人にご相談があるのですがいいでしょうか？」

「…いやよー!」

即答の園子

驚く里香

「何故ですか?」

「そんな堅苦しい話し方じゃ相談になんか乗れないわ。もう友達なんだから普通に喋りましようよ!」

と園子、里香はホツとした顔を見せた

「分かったです。それでご相談なんですけど…、私、今まで工藤君に恋してましたがもう蘭さんになわなので諦めることにしたんです。

それで園子さん、園子さんはいつも工藤君と蘭さんをからかってくるでしょう?」

私も工藤君と蘭さんの恋を応援したいんです!何かいい方法ってありませんか、私、園子さんたちに協力したいんです!」

頭を下げる里香、志保は驚き、「顔を上げて」という。

里香は顔を上げた

園子は少し考えた



「そうだわ！！いい考えが思いついたかも…。如月さん、志保さん、協力お願い！！絶対にこの作戦なら成功するわ！100%！」

イキナリガタンという音を立てて椅子から立ち上がり力説し始めた園子

志保と里香は顔を見合わせて瞬きをする

ベラベラと作戦を語り始めた園子、志保は別にどうでもいいという顔で話を聞いているし、里香は真面目に聞いている

そして力説し終えたときにはもう蘭が園子の机の前にいた

皆、仰天

「ららら蘭、今の話、聞こえてた！？！？」

勢いよく聞く園子に少し困った顔をし苦笑する蘭

「別に、何も聞いてないけど何かあったの？何か作戦？私も手伝おうか？」

笑顔で聞く蘭

「い・いやぁー、その…」

「いいのよ、たいした話じゃないから…。ただ昨日の事件の話で盛り上がっていただけよ。」

そういえば工藤君は昨日、帰り遅かったらしいわよ、事情聴取に立ち会ったって。」

蘭さん、そんな彼のために愛妻弁当ちゃんと作ってきた？」

助け舟を出す志保

蘭は笑顔で「うん！」と頷いた

「ならよかったわね。」

と志保

園子はジェスチャーで志保にお礼を言った

その日の放課後、園子と里香と志保は鈴木邸に集まった  
作戦会議である



「ねえ、園子さんの計画は分かったけど大丈夫かしら？蘭さんとはもかく工藤君はお見通し力とかは半端ないわよ。まあ、女性面に対しては鈍感な部分もあるけど…。」

志保は自分の意見を主張している

園子は自分のベッドに座り腕を組み考えている

「何かいい方法はないんでしょうか…。…あつ、そうですね！」

里香は園子と志保を呼んで作戦を高校にいたときの園子みたく力説し始めた

力説を終えたとき

「おー、それいいじゃない!！」

園子はぱちんと指を鳴らす

志保も「まあ、いいんじゃない、さっきの作戦よりは」と呟いた

こうして、作戦がスタートした…

Story 29 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/24 桜実保乃佳

S t o r y 3 0 (前書き)

S t o r y 2 9 の次の日

新一ら5人は今日もいつものどおりに学校へ向かう

しかし里香と園子はルンルン気分だった  
新一と蘭の頭には？ が浮かんでいる

志保はクスリと笑っている

校門前に到着したとき…

「里香さん、少しお話があるわ。中庭に来てくれない？」

と1人の気が強い女子生徒狩りからの前に立ちほだかった

里香は少し驚いたが「よろしいですね。」といい、その場を後にした

全員は気になり後を追った

中庭

「ねえ、里香さん、貴女いいましたよね？毛利蘭を懲らしめよう。計画は順調ですか？」

次はどうやって毛利蘭を懲らしめればいいの？」

1人の女子生徒が聞いた

里香は冷や汗をたらす

蘭と仲良くなってしまったなんていえない  
しかしいわなければ駄目だ



「私、もう毛利蘭を懲らしめるなんてそんな馬鹿らしいことはやめますわ。」

もう、蘭さんとは友達になったんですの。だからもう私はこんなチームから脱退します。」

里香はそういつとその場を去ろうとした

「…アンタ、何、意味不明なコトいつてるの？あんたが作ったんでしょ！」

アタシたちはアンタが抜けるというなら…コツチにも考えがある！！バカにしたことを後悔してもらってコト…、どついう意味か…分かるよね？

皆、囲んでっ！！」

代表的な女子生徒がいうとメンバー全員が里香を囲んだ

里香は周りを見回す

女子生徒が睨みの目で見ている

「…きゃっ！！」

突き飛ばされた里香

「せーのっっ！！」

「キャハハハっ！やれやれ！！」

突き飛ばされたり蹴られたりと里香はやられた  
笑い声が絶えない

「やめて！やめなさい！！」

里香が叫んでも皆は当然のことながらやめない

蘭たちはそれを見ていた

「里香ちゃん！！」

蘭は見ていられなくなり、その場へと飛び出していった  
後に続き志保らも出る

音に気付き、皆、蘭のほうを見る

「アンタ、毛利蘭でしょ？何、ココはアンタらの来る場所じゃない  
けど……。」

蘭を少し強く突き飛ばす女子生徒  
蘭は近くにあった壁にぶつかった

「…ちよつ、後ろ。」

女子生徒がもう1人の女子生徒の服のすそをつかみ言うと女子生徒  
は後ろを振り向き焦り始めた  
何故なら…

「く・工藤新一!!」

新一が立っていたから

「俺のダチらに何やってんの？」

笑顔でいっているようだが、明らかに怒りがこもっているのが分かる  
女子生徒らは里香を1回ずつ蹴ってからいなくなった

蘭も相当、怖かったのかへなへなとその場に座り込んだ

志保は里香に駆け寄った

「大丈夫、立てる？」

志保に手を貸してもらい、たち上がる里香  
新一は蘭に駆け寄った

「蘭、大丈夫か？」

新一も志保同様、手を貸した  
蘭はすぐに立ち上がったが：

「新一、怖かったよーっ！！」

と新一に抱きついた

新一は少し驚いていたが、新一も蘭を包み込むように優しく抱いた

里香とその場にいた園子は頬を赤くしてみていた

新一は蘭のうつたところを見る

「軽く頭をうつただけだから大丈夫だよ。たんこぶも出来てないから…。」

爽やかスマイルで答える蘭

「でも一応、見てもらったほうが…。微妙に腕、かすってんじゃねえか…。血出てるぞ。」

蘭の腕をとり見る新一

赤面する蘭

「こんなのかすり傷だよ！あ、ほらチャイム鳴っちゃうよ！！」

蘭は新一の背中を押して去っていった

園子らも慌てて後を追った

そのとき3人は思った

『作戦なんか立てなくても2人は絶対、両思いになれること間違いない』

だと…

Story 30 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/26 桜実保乃佳

S t o r y 3 1 (前書き)

S t o r y 3 0 2 回 目

## Story 31

里香の元仲間は蘭と里香への攻撃をやめなかった

そして昼食の時間に…

「新一、お弁当だよーっ！」

蘭が包み袋を持って新一の元へやってくる

それと同時に里香と志保と園子もやってきた

しかし里香の元仲間も来た

「ねえ、里香さん、私たちも一緒に昼食食べてもいいですかあ…？」

元仲間が可愛いお弁当包み袋を持ってやってきた

里香は少し冷や汗をかいたが

「お断りしますわ。屋上でいただきますしよっ、蘭さん、園子さん、志保さん、工藤君。」



とお弁当の包み袋を持って去ろうとした  
新一らも里香の後を追おうとする

「ねえ、工藤くん、里香なんかほっというて私たちとお弁当食べようよー。」

女子生徒は新一の腕をつかむ

新一は苦笑しながらも断っている

しかし女子生徒はしつこい

「…ねえ毛利蘭だっけ？私たち、3人で工藤君とお食事を取りたいのよ、だからあ、ココから消えてくれないかなあ…。」

さっさと消えてくれないとこっしちゃうよー。」

女子生徒は蘭の弁当を強引につかみ思い切り、2つのお弁当箱を地面に投げ捨てた

お弁当箱がひっくり返り、おかずの中身がグシャグシャに出てきた

「ああ、お弁当が…！」

蘭は慌ててお弁当箱の中身を拾う

女子生徒はその隙を狙ったんだろう

「さっ、こんな女、放つといてさっさと私たちとお弁当を食べましようっ！！！」

腕をつかみ教室を出て行くこうとする女子生徒ら  
しかし新一は女子生徒の腕を強引に振り払った

「蘭、大丈夫か？」

新一は蘭の弁当箱の中に入っている中身を拾い始めた  
蘭は笑顔でお礼をいった

幸い、お弁当は1つだけだったためすぐに終わった

「毛利さんたち大丈夫ですか？…なっ！！何してるんですの！！貴方たち！！！」

「ちよっ、何すんだよっ！！！」

里香もさっきの女子生徒と同じコトをした

女子生徒は「アンタ最低っ！！！」と怒りを投げつけ去っていった

「最低なのは誰ですか！？毛利さん、大丈夫ですか？良かったら私のお弁当を分けましようか？」

里香が聞くと

「大丈夫。心配してくれて有難う、里香ちゃん。」

と笑顔で言う

里香はほっとした

そして4人は屋上へと向かった

屋上

「ゴメンね新一、お弁当せっかく作ったのにグチャグチャになっちゃって…。今日本当は、新一の大好きなハンバーグを作ったんだけど…。」

でももうグチャグチャだと食べられないよね…。しょうがないから学食にしようか？」

蘭は制服のポケットから財布を取り出した

「いいんじゃないかねえか、味は変わんねえんだからよ。」

新一は蘭が持っているお弁当箱から手でつまみ食い

「…うめえじゃん！！俺、これ貰うわ。蘭も食べよ！！」

新一は蘭の弁当箱からウィンナーをとり蘭の口に突っ込むように渡した

蘭は思い切り赤面したが美味しそうに食べていた

その横では…

「工藤君と蘭さん、ラブラブです。この調子で行けばいいですよね。」

「

と里香が園子に告げ口した

園子は食べながら「あつたりまえよ!」と嬉しそうにいていた

そして志保はどつでもいいという感じで昼食をとっていた

Story 31 (後書き)

次回もヨロです！  
感想等待着つてます

平成23年3/27 桜実保乃佳

ある日のことだ

いい加減、志保、里香、園子の3人は2人のラブラブ作戦を終了させ、早く恋人同士にさせようと思っていた

それも作戦はなしで…

帝丹高校

「はぁーっ！何で新一君は鈍感なのかしら鈍感っっ！」

園子は微妙に切れている

志保と里香は呆れている

蘭は「何で園子怒ってるの？」と思っている

新一も園子らの席を見て一瞬身震いした

園子のオーラが強烈だったことが分かるだろう

すると担任が入ってきて朝のHRが始まった

そして1時間目

学級活動、略して学活だ

「じゃあ、今日は後期役員を決めます。まずは学級委員と議長、副議長、書記を決めたいと思います。」

まずは委員長と副委員長から。計2人です。

まずやりたい人はいますか？もしもいなかったら推薦で決めたいと思います。」

クラス中が少しざわつく

結局、学級委員等の役員が決まった

そして次は各役員を決める

主に授業の雑務や、テストの範囲表・ポイント表を作る学芸専門委員

制服・ジャージ・挨拶等といった生活面を見る生活専門委員

校内を綺麗にしたり、美化を専門に活動する美化専門委員

主に図書を専門として活動する図書専門委員

それぞれ男女1名ずつ。

そのとき園子と里香は思った



『新一と蘭がやれば2人の愛はいつそう深まるのではないか…』と

「先生、私は学芸専門委員に工藤新一君と毛利蘭さんを推薦します  
！！」

園子が勢いよく立ち上がっていった  
クラス中の生徒が一斉に賛成の声を上げる

新一と蘭は仕方なく立ち上がり教壇の前へ行った

そして挨拶をし、正式に委員も決まったところで学活は終わった

「工藤君、毛利さん、いいですか？」

担任に呼ばれ新一と蘭は担任の元へ

「何ですか？」

と蘭

「委員が決まって早々で悪いんだけど、貴方たちで次の時間に使う教材を持ってきてほしいの。」

ちよつと一緒にきてくれない？」

新一と蘭はついてった

そして教材を人数分受け取り、教室へ戻った

「結構、人数分だけあって重いわね。新一、いいわよね、軽いもので…。」

蘭は新一が持っている教材を見て羨ましそうに言う  
鼻で笑う新一

「普通、重いものって男が持つものじゃないの？」

わざとジト目でいう蘭

新一は少し冷や汗をたらす

そして

「わあったよ！持てばいいんだろっ！…んじゃ、蘭、これ変わりにもてよ…！」

ヤケクソになっていう新一にふく蘭

「じゃあ、宜しくね！頼れる学芸専門委員さん」

蘭は新一の教材ととりかえるのと同時に笑顔で言った  
新一は小さく笑った後「任せとけ」と自信満々。

そのとき…

「きゃっ…！」

蘭は教材を落としそうになり慌てて拾ったが滑って頭から転びそうになる

新一は教材をすばやく地面に置き

「蘭…！」

お姫様抱っこ体制で蘭を支えた  
教材がバラバラと落ちる

「…し・新一／／／」

赤面する蘭

「怪我、ねーか？大丈夫か？」

新一が聞く

蘭との距離が近い

慌てて蘭を下ろす

蘭は落とした教材を拾った

「有難う、新一。さ、早く教室に戻る！！」

蘭は教材を持ち直すと新一にいい、2人は教室に戻った

ところが新一と蘭の後ろでカメラを持った人がいた

「…クスクス…、今日の話題はこれで決まり。」

そう静かに言つとその場から去つた  
しかし新一と蘭はまだそのコトを知らない

2 - B

「ふうっ、終了。」

蘭は一息つく

「蘭蘭！！さっきは有難う！！いいのもらったわ！！」

園子はイキナリ蘭に飛びつくなり蘭の手を握った  
蘭は意味が分かっていないらしく目が点

新一も？ を浮かべている

「いいのって何？」

蘭が聞く

続けて新一も頷く

「何ってこれよこれ！！」

園子はすばやく自分の机からカメラを持ってきてデーターを見せた  
クラスメートも集まって、写真を覗き込む

それは見事に新一が蘭をお姫様抱っこしている写真、しかもとても  
顔が近かった

新一と蘭は赤面

「そそそそ園子！こんな写真、今すぐ消して！！」

と蘭、里香がその横で小さくクスクス笑っていた

志保は新一の元へ

「貴方たちって正真正銘のバカップルよね。幸せな日々を送ってそう。」

と小さく呟いた

新一は苦笑していた

結局、その日2・Bにいる間は、新一と蘭の写真で持ちきりだった

担任でさえ、赤面して話をつつとりとして聞いていたのだった…

Story 32 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年3/30 桜実保乃佳



S t o r y 33

新一と蘭の恋愛仲は結構、深まってきた  
皆、ニコニコ顔

里香も園子もあととはあまり乗り気ではない志保も蘭と新一の中を見  
て微笑んでいる

ある日のことだった

如月邸

「はあ、今日も疲れましたわ。今帰りました、お父さん、お母さん。」

里香はローファーを脱ぐ

「里香様、お帰りなさいませ。」

萩谷がやってくる

里香から鞆や上着を受け取る

里香は礼代わりに頭を下げると、自分の部屋へと向かっていった

里香 room

「…はあ、今日も疲れましたわ。さて、少し休憩…。  
何か面白い番組やってないかしら…。」

里香は自分専用のテレビをつけ、リモコンを持ち自分の見たい番組を探す

たまたま自分の好きそうな番組がやっていたため見た

しかし終わりに近づいてたためかすぐに終わってしまった

里香は少しつまらなそうにテレビのリモコンを再び持ちチャンネルを変えていく

そのとき

「…里香、話があるわ…。ちょっとリビングへ来て頂戴。」

母親が静かに里香の部屋の扉を開けてこういった

里香は「は・はい。」と静かに言うとテレビの電源を切ってリビン

グへと向かった

リビング

「あの、話って何ですか？」

母親が座ると同時に里香も座る  
少し母親の雰囲気違った

それだけではなかった

いつもは人一倍明るい母親も沈んでいる

「落ち着いて聞きなさい。実は、お父さん、してしまったの、殺人を……」

里香は絶句した

「……私たち、どうすれば……っ……もうお仕舞いよ。如月財閥も全部……！」

泣き崩れる母親

里香も励ましたが内心相当焦っていた

「殺人って犯罪行為じゃないですか……！」

と里香

母親は顔を手で覆いながら小さく頷く

「もうお仕舞い。私……、もう駄目……。さよなら、財閥を直しくね、里香。」

母親は勢いよくリビングを飛び出した

「お母さん!!」

静かに玄関の扉が閉まる音がした  
里香は追いかけたが、見つからない

そのとき思いついたコト

「工藤君…。宮野さん、蘭さん、園子さん!!」

そう暖かい仲間の元へ行けば…  
里香は必死で走り続けた

「はぁ…っ…あ、着いた…。」

里香は工藤邸にたどり着いた  
中からは笑い声が聞こえる

園子、志保、蘭、新一の笑い声だろう  
急いでチャイムを鳴らす

「どちら様ですか？」

新一の声が聞こえる

「如月里香ですわ！！工藤君、貴方は私がここに駆け込んできた理由、知っているんでしょう？」

新一は少しの間黙っていたが「今行くから。」といい、門を開いた。里香は素早く中へと入った

「中、入れ。」

新一の誘導でリビングへと行く里香  
リビングに入ると里香の予想したメンバーがそろっていた

「工藤君、警察の人から話は聞いているんでしょう！？」

いきなり新一の胸倉をつかむ里香  
志保と園子は驚いて2人をとめた

蘭は心配そうな顔で2人を見ている

「…悪い、ショック、与えるかと思ったんだ。」

静かに謝る新一

「始めから言ってくれたらショックは少しは和らいだはず、なのに  
なんで…!？」

里香は泣き崩れた

新一はその場にただ立ち尽くしていた

「どうせ、警察から家族として色々聞かれるんでしょうっ?」

と里香

新一は「多分」と小さく呟いた

里香は再び泣き崩れた



Story 33 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年4/3 桜実保乃佳

S t o r y 3 4 (前書き)

S t o r y 3 3 の次の日

## Story 34

今日は学校。里香は恐ろしくて学校へと行けない様子

なぜなら…

里香の父親の龍矢が殺人を起こしてしまった。というニュースが学校中に広まってるかもしれないからだった

制服を着ると里香は深呼吸。緊張を解す

「頑張らなくては…。」

と呟く

里香は朝早くマスコミ等から逃げるために、いつもより早く家を出た

里香が向かった先

工藤邸

「お早うございます。こんな朝からお邪魔してごめんなさい。」

里香は今、工藤邸のリビングにいる

「…まあ、マスコミが嗅ぎ付けてるからな。」

新一はそういつと里香に珈琲を出す  
お礼を言って里香は珈琲を一口飲む

そのとき

「新一、お早う！朝ごはん、作れないんでしょう？だからつくりに…あ、里香ちゃん。」

蘭がりビングへと入ってきた

里香は立ち上がり、挨拶をする、その後ろには、園子がいた

園子は少し顔を顰めた

「ねえ、里香ちゃん、貴女、言ったわよね？蘭と新一君の恋を応援するって。」

なのに何で2人でいるのよ…！」

怒る園子

里香は顔を下に向けた

「…園子、訳があるんだ。」

新一が里香を庇う

蘭は絶句した

なぜ里香を庇っているのかを…知りたかった

「新一君は黙ってて！里香ちゃん、いいえ、如月さん、私、貴女と

縁を切ったほうがよさそうね。

裏切り者と一緒に行動するなんてありえないもの。

蘭、行きましょう！こんな女と浮気相手は放っておいて！！」

園子は蘭の腕を強引につかむとリビングを後にしようとした

「…あら、貴方達何やってるの？こんな朝っぱらから。」

志保が制服を着て、新一の家へとやってきた

園子は志保に訳を話す

志保はただ黙って聞いていた

「って訳なのよ！酷いと思わない？最低だと思わない？裏切ったのよ！！私たちを。」

志保に訴える園子

「あら、貴方達、昨日のニュースを見てないの？」

深刻に言う志保

園子と蘭はその言葉を聞くと目を丸くした

里香は涙目になっていく

「…今更、涙目になっても遅いわよ!!」

「園子さん、貴女、知ってると思います。私が朝早くからココにいる理由は昨日、私がココに駆け込んだコトと関係があるんです!!」

里香が言った

園子は「はあ？」と里香を疑うよう

「…私からは話したくありませんが、私の父、如月龍矢が殺人を犯したんです。

私はただマスコミから逃げたくて…。早く来てしまったただけなんです。

こんなの理由にならないというのなら私を嫌ってもいいし、苛めてもかまいません。

ただこれがホントのこと真実です。…う…。」

里香は涙声になっていく

志保は里香を慰めた

園子は少し黙った、蘭も少し里香につられて涙目に

「…御免なさい。如ら…じゃなくて里香ちゃん。誤解してた。本当

に御免なさい！」

頭を下げる園子

里香は涙目で微笑み首を横に振った

「ねえ、里香ちゃん、私、里香ちゃんの力になりたいの。」

蘭は里香の手をとり言った

里香は手を握り返し心からの笑顔でお礼を言った

RRRRR



新一の携帯がなる

新一は携帯を取り出し、かかってきた相手を見る

目暮警部 と表示されている

「はい、工藤です。」

新一は約2分くらい目暮十三警部と話をしてから電話の電源を切った  
かなり深刻そうな顔

「どうしたの、新一。」

蘭が聞く

新一は静かに携帯を閉じた

「…如月の母親が自殺した…。」

一気に空気が静まり返った

「ねえ、工藤君、もう一回言っつて。」

里香は新一に言つと新一は再度同じコトを今度は今よりも重苦しい  
声で言つた

里香は泣き崩れた

新一は両手を強く握つた

学校に行く時間が近づいているのに皆、そんなコトは頭の中には入  
つていなかった

Story 34 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年4/4 桜実保乃佳

S t o r y 3 5 (前書き)

S t o r y 3 4 と同日

里香は泣き崩れた後、気を取り直し

「…ドコでお母さんが見つかったんですの？」

と冷静さを取り戻し聞いた  
新一は少し黙った

話していいか迷ったからだ

「…米花森林の中。首をつった状態で見つかったんだ。」

里香は「そうですか」と小さく呟いた

そして時計を見た

学校に行く時間だったため、学校に向かう

「出てきたぞ！高校生探偵の工藤新一も一緒だ！！」

「如月里香さんですよ、お話を聞かせてください！！」

「お父様のコトをどうお考えですか!？」

マスコミが一気に押し寄せる

新一らは里香を優先するため、志保に里香を任せ、新一、蘭、園子の3人は適当にテレビカメラに笑顔を振りまいていた

そして学校へ

帝丹高校

「もう大丈夫でしょうね。」

呟く志保

「…御免なさい、宮野さん、工藤君たちは大丈夫でしょうか。」

謝り新一らの心配をする里香

志保は少し黙ったが

「工藤君たちなら大丈夫なんじゃない。」

と素っ気無く返事を返し上靴を履いて教室へと向かった  
しかし教室へ行くまでも苦痛だった

ニユースで大きく取り上げられているため里香を見るたびに生徒は  
クスクスと笑ったり、陰口を言ったりする

「気にしないで行きましょ。」

志保の言葉で里香は元気付けられた

教室に入ると志保と里香の前に何人かの女子生徒が立ち並んだ

「如月さんのお父さん、殺人を犯したんですってね、最低な父親っ！その娘が学校に来てるなんて恥だわ！」

さっさとココから出て行ってくれない？空気が腐るのよ、友達に宮野さんも一緒にね。」

鼻で笑う女子生徒

里香は全身震えているが志保はまっすぐな目で女子生徒らを見つめていた

「：貴方達にそんなことを言う権利はないわ。わかったらどけて頂戴、邪魔、通行人のコト、考えてくれなくちゃ困るわね。」

全く、ほら、如月さん、行くわよ。こんな頭の腐った人たちの発言なんか気にしてたら頭が腐るわ。」

志保は冷静に言つと里香の手を引いて自分の机へと向かった

「：頭が腐るですって…っ！聞いてればいいたい放題じゃない！！ふざけんじゃないわよ…！」

女子生徒らのうちの1人が手を振り上げる

志保は女子生徒を見つめていた

女子生徒は手が止まる



「なっ、何よ！いい子ぶっちゃって！」

女子生徒は振り上げた手をおろし、他の生徒らとどこかへ行ってしまうた

志保は溜め息をつくと鞆を置き、椅子に座った

「如月さん、貴女、まだ変なこと気にしてるの？考えるだけ時間の無駄よ。」

と志保

里香は小さく頷くと自分の席へと向かった

「…はあっ、ギリギリセーフだな。」

新一が入ってきた

疲れたのか息を切らしている

蘭は新一に追いつかなかったのか新一の手をがっちり握っていた

園子は少し後に着いた

「何とかマスコミは追い返せたわ。」

と園子

里香は3人の元へ行き頭を深々と下げ、礼を言った

「私のせいで御免なさい！！巻き込んでしまつて…。」

と里香

「何言つてんのよ、私たち仲間でしょ！困ったときはお互い様よ！」

里香の肩を軽く叩いて笑顔で言う園子

里香は頭を上げると飛び切りの笑顔で再び礼を言った

「そつだよ、里香ちゃん。何かあったら私たちが相談にのるから！」

と蘭

新一はその様子を近くで見て微笑んでいた

学校は何とか終わり、5人は帰路に、里香は志保の家に暫くお邪魔することになっていた

「またマスコミがうるついでるかも知れねえな、宮野と如月は先に帰っててくれ。」

マスコミは俺らでひきつけるから。」

冷静に新一が言つと志保は小さく頷き里香を連れて先に帰つていった  
新一も帰つた

園子は途中で別れた

帰路

「新一、マスコミ私、怖いんだよね。」

少し苦笑して言う蘭

新一は少し蘭を見ると

「やばくなったら俺が何とかしてやるから心配するな！」

と白い歯を見せて笑った

蘭は礼を言った

何とか帰路ではマスコミに気付かれず帰ることが出来た

自宅に着いたときには志保と里香が工藤邸の前で待っていた

そしてもう2人、ポニーテールの女子と色黒肌の男が立っていた

瞬きをして、自宅へと向かう新一

「久しぶりやな！工藤！」

来たのは西の高校生探偵、服部平次そして連れれの遠山和葉だった

Story 35 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年4/5 桜実保乃佳

Story 36 (前書き)

少し楽しい場面です

「何で服部、お前がここにいるんだよ!？」

新一は微妙に切れている

新一は外で会ったとき、平次のみ外に追い出してやろうと思ったが蘭に強く言われて入れざるを得なくなった

志保は呆れてその光景を見、出された珈琲を飲んでいる

蘭と和葉はお互いにまあまあという感じ

新一の眉毛はピクピクと微妙に動いていた

平次は何も気にしてませんと言う顔

更にムカつく新一

「ゴメンなあ、工藤君、平次のアホが来たというて聞かんねや。平次、少しは人の迷惑うちゅーもんを考えたらどうなんや?」

和葉は新一に謝りながらジト目で平次を睨む

「何言ってるんや、自分も姉ちゃんに会えるいうて喜んでったくせ

に…。」

負けじと睨む返す平次

和葉は少し黙ったが「何のことでしょうか」と言わんばかりの顔  
暫く睨み合いが続く

新一も蘭も止めているが止まらない  
志保は更に呆れながら珈琲を飲んだ

「まあ、とりあえず、幼稚園児じゃないんだからさ…ね？」

と蘭

「「平次（和葉）が子どもだけや！！」」

声が重なっていきびつたりの2人

里香はそのやり取りを見てクスクスと笑っていた

平次と和葉はその声を聞き、咄嗟に恒例の夫婦痴話喧嘩をやめて赤面

「あっ、御免なさい！！笑うつもりはなかったんですが面白くて…  
っい。」



深々と頭を下げる里香  
和葉は苦笑していた

平次は再び和葉をジト目で睨んだ

「あの、1つお聞きしますが、貴方方2人はもう付き合っておられるんですか？」

里香が聞くと2人は茹蛸の様に真っ赤に

「なななな何でなん!? 何でアタシがこんな色黒男と付き合い合わないのかんのん!？」

「こっちの台詞じゃボケ！」

再び始まった痴話喧嘩。

すると志保が珈琲をテーブルの上に置き

「うるさくするなら外でやってくれる? 落ち着けないわ。」

と冷静に注意

「…はい。」

平次と和葉は下を向いて謝った

志保小さく頷くと再びソファーに座り珈琲を飲み始めた

しかし喧嘩は繰り返されるもの。ずっと言い返せば言い返すの繰り返し

志保はずっと平次と和葉、特に平次をジト目で見た  
咄嗟に手で口を押さえる平次

和葉も同じ。新一と蘭は深い溜め息をついた  
里香はただその光景を黙って見ていた

「あ、そういえば姉ちゃんの名前、聞いとらんかったな。」  
と平次

和葉はそういえばという風に手を叩く

「えっと、如月里香です。宜しくお願いします。」

里香は自己紹介

「アタシ、遠山和葉！」

「服部平次や。…ん？姉ちゃん、今、如月ゆうたか？」

里香は小さく頷いた

内心はドキドキしているだろう

和葉は少し目を丸くした

「もしかして如月財閥の娘さんなん？」

と和葉

里香は頷きたくなかったが頷きざるを得なかったため小さく頷いた

里香は頭の中が真っ白

「和葉さん、色黒君、如月財閥のニュースのコトについては何も聞かないであげて頂戴。」

志保が里香の肩に手を乗せ言う

「里香ちゃん、今、凄く辛いのよ。」

と蘭

和葉と平次は少し顔を見合わせてから頷いた

里香はお礼を言う

和葉は里香と友達になろうという意味も込めて握手をした

「それで、服部たちはいつまでいんだよ。」

少し、かなりイラついた表情そして声で新一が聞く

「私、今日、新一の家に泊まっていくね。」

「蘭ちゃんが泊まるんならアタシもええ？」

和葉が続けて聞くと新一は快くOKしたが…

「そんなら俺は工藤の部屋やな！」

平次が言うと新一は少し平次を睨むと…

「却下、お前は公園のベンチで寝てる。」

と素っ気無く言った

平次は「そらないやろ」という目で新一を睨んだ

「…冗談。俺の部屋で寝かせてやるよ。しゃーねえな。」

新一が言つと平次は子どもみたいに喜んだ

「ベンチで寝ないで済む！」

と呟きながら…

Story 36 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年4/7 桜実保乃佳

平次たちが来てから3日後…

3連休が終わり、平次と和葉以外の人は普通に学校がある

朝、志保と里香は早めに工藤邸に来て、一緒に朝食をとりに来た  
勿論のコト女子全員で朝食を作り男子2人は、新聞に載っていた事  
件の謎をあーだこーだ2人で言い合い。  
その姿をみて笑う里香

「出来たよーっ!!」

「ほら、早、席着いて!!」

蘭と和葉の声で2人は新聞をとじ、席に着く  
皆で声を合わせて「いただきます」をし、食べ始めた

「服部、俺ら学校だけど、2人はいい加減、自分の学校戻ったほう  
がいいんじゃないか。」

新一は少し焦げかかった食パンを食べながら聞いた

平次と和葉は顔を見合わせ、少しの間2人して席を立った  
そして少しして戻ってきた

「おっ、おい。」

驚く新一

蘭と志保も流石に驚いていた

「……ててて転入生ですか？」

と里香

平次と和葉は帝丹高校の制服を着ていた

「アタシら、今日から蘭ちゃんたちと同じ高校通うことになったんですよ、これから卒業までよろしゅうね。」

クラスはまだわからへんけど、同じクラスがええなあ……。」「

和葉は蘭・志保・里香の順に握手

平次は少しネクタイを弄っている

新一は平次を見る



「やっぱ、ネクタイって落ち着かなあ…。工藤、ネクタイ、曲が  
つとらんか？」

確認を頼む平次

新一は段々、笑顔になっていき仕舞いには

「ハハハハハハっ！服部がネクタイ、ありえねえーっ！超ウケる！  
」

目からは笑いすぎたのか涙が出てきている  
平次は少し顔が赤くなる

「何やねん、そんな笑うなや！！」

と平次

女子は平次の姿を少し見た  
やはり…反応は同じ

「ハハハっ、平次、似合っつとらん、学ランの方がまだ似合っつとった  
わ！！」

笑い転げる和葉

蘭も笑っている、里香も…

志保は鼻で笑った

平次はしょげた

皆は平次を無視し、朝食をとり始めた

更にしょげる平次

「服部、ドンマイ。」

新一が呟くように平次に言々と平次はもういいという顔で朝食をとる  
そして朝食をとり終えると学校へ行く時間まで後片付けやテレビを  
見てすこす

そして学校へ…

しかし里香は微妙に震えている

「里香ちゃん、大丈夫よ。私たちがついてるから。」

蘭は優しく里香の手を包むように握る

里香は少しの笑顔でうなずく

和葉も「アタシに任しとき！」と胸を軽く叩く

平次は「そんなんで大丈夫かいな」と心配そうな顔

そんなときの志保の一言

「貴方たち、転入生だから同じクラスになるか分からないわよ。」

和葉と平次は苦笑した

里香は少し笑うとローファーをはき、1つ深呼吸し学校へと向かった  
帝丹高校に着くと平次と和葉は挨拶に行くため職員室へ向かい別れた  
園子と合流し、教室へ向かう、その途中に平次と和葉のことを話した  
園子は喜んでいた

そして2 - Bの教室に着いた

ゆっくりと教室の扉を開ける里香  
ざわついていた教室が静まり返る

「…来たんだ、殺人鬼の娘。来なければいいのに。」

誰かが呟いた声、静かになった教室内に響いた  
里香は少し俯く

「ちよつと、あんた達ねえ…。」

段々、怒っていく園子  
蘭は里香を慰めている

新一はスタスタと女子の前へ行つた

その女子たちは前に蘭を苛めた女子軍団の仲間でもあつた

「あ、工藤くうーん、おはよおー。」

可愛い子ぶり愛想良く挨拶する女子ら

新一は無表情

むしろ怒っているオーラが出ている

「俺のダチらに手、出すな。」

新一はそれだけ言うと自分の席に鞆を置きに行つた  
蘭は新一の元へ行き

「新一、有難う！」

と新一の手をギュッと握つた  
クラス中から「ヒューヒュー」「熱いよ！お2人さん！」等といっ

た、からかいの言葉が聞こえてくる

「バツ・バード！なんじゃねえよ／＼／」

赤面して拒否する新一

蘭も少し赤面

そのとき

「席付いてーっ」

と担任の美和が入ってきた  
クラスメイトは席に着く

「HRホームルームを始める前に今日は、転校生が2人います。入って！」

美和が呼ぶと2人の生徒が入ってきた  
その2人はやはり…

「今日から2・Bの一員となった」

「服部平次や！」

「遠山和葉や！」

平次と和葉だった…

平次と和葉は平次は新一の隣の席

和葉は志保の席の前になった…

Story 37 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年4/8 桜実保乃佳

和葉と平次は休み時間になると一斉にクラス中の人気者に女子だけでもない、和葉に興味を持った男子も集まってきた

「アタシ、平次君の大ファンなのーっ！メアド教えてーっ！」

クラス中の女子が携帯を持って、平次の元へと集まった

「遠山…和葉さん、僕とメアド交換しませんか？」

同じく和葉も男子の人気者  
2人は苦笑

平次は和葉に近寄る男に怒りを燃やしていたし、反対に和葉は平次に近寄る女に怒りを燃やしていた

「あつ、そつだ、平次君、アタシたちが校内を案内してあげるねえ、まだ分からないでしょう？」



無理やり平次の手を引こうとする、和葉は怒りがMAXに達したのか

「アタシ、蘭ちゃんと一緒に校内みたいなあ…。」

工藤君、里香ちゃん、志保さんお願い出来へん？平次も一緒に行こうや！」

と女子がつかんでいる反対の手をつかんだ

女子からの視線が冷たい

しかし和葉は気にせず平次の手をとるとそそくさと蘭たちを連れて廊下へと出た

「…ちよ、和葉いい加減に手え、離せ！」

平次は微妙に赤面しながら言う

和葉はスタスタと平次の言葉を無視し、手を握りながら歩き続ける  
蘭と新一はその姿を呆れながら見た

志保と里香はクスクス笑っている、そして志保は欠伸を1つ

「和葉ちゃん、ココがお手洗い、服部君は勿論のコト男子トイレを  
使用してね。」

笑顔で言う蘭

「俺はそこまで変体じゃないわいっ!!！」

微妙に起こっている平次

「…そこまでつてコトは少しは変態なんですね。」

「嫌らしい。」

「そんな奴がよく事件解決できるな。」

批判の聲が上がる

平次は思い切り赤面し「つ・次！！」と一人でスタスタと行ってしまった

しかし…

「色黒君、さっき通った道をもう1回通ってどうするの?」

志保に止められた

平次は再びしょげた

こうして案内は続いていった

帰ってくるると同時に授業が始まった

授業している最中も女子らの視線が平次に向かう

平次は集中してノートが取れない

和葉は平次を見つめている女子らに怒りのオーラを出し続けていた

そして給食時間

「平次君、一緒にご飯、食べましょう?」

お弁当を持って女子らがやってくる

和葉は再び平次を引っ張ってお弁当を持って蘭たちの席へ行ってしまった

女子らは舌打ちをしてどこかへ行ってしまった

平次らはゆっくりと食事を取るために屋上へ行って昼食をとったら  
しい

そして帰ってくると昼休み、女子らが集まってくるだろうという思  
いから新一・平次・和葉・蘭・志保・里香は皆で校内案内 s e c o  
n d t i m e が始まった

そしてその途中

「ねえ、服部君はともかくとして和葉ちゃんも部活動、何かに入部  
するの? ココには剣道部はあるけど合気道部はないよ。」

蘭が聞いた

帝丹高校にはサッカー部・野球部・女子バレー部・男子バレー部・  
女子バドミントン部・男子バドミントン部・女子バスケット部・男子バ  
スケ部・美術部・吹奏楽部・合唱部・コンピューター部・剣道部そ  
して蘭が入っている空手部等といった何種類もの部活動が動いている

( 部活リストは適当です。間違っていたらご指摘お願いします  
by 作者 )

和葉は少し考える

「うーん、剣道部のマネージャーでもやろつかなあ…。」

と和葉、平次は少し目を丸くした

和葉は平次の反応が気に入らなかつたのか、ジト目で平次を睨んだ

「何？アタシがマネージャーやったら悪いことでもあるん？アタシは平次のお姉さん役やから世話しなあかんから…仕方なくマネージャーやる思たやけ！！」

赤面する和葉

「まあ、サポートよろしゅうな。」

平次は和葉の肩を軽く叩き笑顔で言った

蘭と新一そして志保、また会ったばかりの里香の全員の思いが一致した

『お互いに素直になれ』

と…

Story 38 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年4/9 桜実保乃佳

Story 39 (前書き)

平次と和葉と蘭と志保と里香は新一の家に住んでいる設定です



平次と和葉、志保・里香・蘭が工藤家で暮らし始めてから1週間  
今日は休日

皆でぶらりと街へ出ようと思ったが里香がはずせない用事がある  
とかでなくなった

里香は少しオシヤレをして鼻歌なんて歌いながら鏡の前で帽子を被  
っている

皆、理解できずコソコソと話している

「じゃあ、少し出かけてきます。」

里香が玄関でお辞儀をすると女子は見送った

里香は家を出ると途端に鼻歌を歌っていた空気からガラリと暗い雰  
囲気になった

静かにコツコツと靴のヒールの音が響き始めた

里香はある場所へと向かっていた

里香

「…着きました。」

深呼吸する里香、里香がたどり着いた場所は夕日が綺麗に見えるところ。

まだ誰も知らない、如月一家だけの秘密の場所だったりもした  
誰もいないため里香の父親は遊具を作ってやった

小さな木で出来たブランコ

今ではもう座っても揺れないし、それ以前に小さいけれど里香にとってはとても思い出深いものの1つとして胸の中にある  
そしてなんと、小さな小屋まで建てた

ログハウスみたいで小さくて寝泊りする設備は万全のところ  
暖炉もキッチンもある

よく冬は来てスキーをしたり、一緒に年を越したこともあっただろう

しかし、もう思い出の場所、如月一家だけの特別な場所とはいえなくなつた

警察が母親を発見したため、警察の人にもわかってしまったのだ  
里香は新一に母親の死んだ場所を聞いた

丁度、里香のいる場所だつた

里香は途中、花屋で買った花を添える

母親の大好きだつた花を詰め合わせた  
手を合わせ黙祷をする

頭の中を回る母親の優しい笑顔、母親の喜怒哀楽。

最近テレビの出演等であまり家には帰ってこれず一緒にいる時間  
も少なかった

いつの間にか溢れ出す涙

里香は必死で涙を拭うが止まらない

「お母さん……」

呟く里香、しかし大好きだった母親は戻ってこない

「……里香ちゃん。」

後ろから声がした、振り向く里香

新一らの姿があった

目を丸くする里香

「蘭さん？……皆も……。どうして？」

止まらない涙を拭いながら聞く里香

「里香ちゃん、不安になって泣いちゃってるんじゃないかなって思  
つて……。それに私たちもちゃんとお参りさせて？」

里香に言う蘭

里香は承知した、手を合わせてお参りをする蘭たち

最後に新一たちが持ってきたものを添える

里香は涙を拭いこういった

「一緒に、入りませんか？そのログハウス…。」

と、新一らは了解した

里香は自分専用の合鍵で入る

新一らは小さく「お邪魔します」といい、入っていった  
中は万全とした設備、頑張れば住めそうなくらい

里香らをはじめ皆で掃除をし、買い物に行き、お菓子等を買って皆  
でティータイム。

楽しんでいる途中、蘭は里香にこういった

「私たちが一緒だから大丈夫！」

と…

Story 39 (後書き)

次回もヨロです！

平成23年4/13 桜実保乃佳

Story 40 (前書き)

無理やり完結です

毎日のように繰り返されてるような日常。

少し飽きてきた、何か面白いことがないかなといつも走り回っている元気な子供達

里香らは阿笠邸に集まっていた

博士の健康診断も重ねてだ

勿論、医師の代わりは志保

「…博士、私、目が悪くなったのかしら？ものすごく体重やら何やら増えてるんだけど、特に…ウエスト。」

私言っただはさよね？毎日欠かさずジョギング、そして肉は避けた三食を毎日しっかりと必ず取る。

…普通なら減るって今年かありえないはずなのに…どうして？変なことは言わないでほしいわ。

まさか肉を隠れて食べていたなんて…。」

と志保



博士は冷や汗をたらしている。

その横で皆、苦笑していた

博士はその後、志保から説教を何時間つけたという話。

そこへ…

「はーかせーっ!!!」

元気な声が聞こえ、元気な勢いでリビングへとやってきた3人の子供達。

吉田歩美、小嶋元太、円谷光彦の3人である

丁度志保の怒り声が最高潮に達したところだった

歩美はその姿を見て硬直、元太と光彦も瞬き

志保は我を取り戻したらしく、少しのスマイルで迎えた

新一と平次は硬直した歩美を揺らすやら突つつくやらして何とかな  
った

「…志保お姉さん、博士に何で怒ってるの?」

歩美が聞く

志保は説明した

笑う元太と光彦

でも光彦はともかく元太は笑うことではない

博士は一瞬、元太とチラリとみた

3人は志保が切れていたためすぐに撤収。

里香はその風景を見てて微笑んでいた。

次の日、皆は学校へ向かう  
授業は退屈で、新一は居眠り。

しかし皆、真剣に授業を聞いている

そしてあることが出た

それは作文。というか文章。

「…皆さんにはこれからあることを題に、書いてもらいます。それは自立。一言でも意味が深ければいいコトにします。」

教師が長々と説明し、作文用紙を渡す

皆、題と文章を書いている

里香はこう書いた

『私は、母親と父親を亡くしました、父親もある事情で今は家には

いません。

私は一人ぼっち、いつも私は皆さんよりお金があるからといって皆さんを貶したり、バカにするのがある意味日課としてありました。しかし、今は私は執事がいなくなってしまう、今は工藤君の家で厄介になっています。

でもいつかは大学へと行くため、工藤邸からいなくなることになります。

家のコトは大きい記事として取り上げられ、就職するときにはマインナーなこととしてとりあげられます。

でも私はそれをプラスにして、自立そして自律をしていきたいと思えます。』

拍手が大きく響き渡る

里香は作文用紙を閉じてから椅子に座った

そして晴れて高校3年も終わり、卒業式。皆、いつもより凛々しく見える

新一は卒業生代表としてスピーチをした、泣いている卒業生や在校生。

卒業証書を持って退場する卒業生は輝いていた

工藤邸に集まる人々、今日は皆で卒業パーティー。  
わいわいがやがや

後に仲良くなつた黒羽快斗や中森青子も読んで皆で盛大に。

快斗はお得意のマジックショー。

青子は助手的な存在だった  
里香も大きく拍手した

その日の夜、皆、泊まることになった  
里香は新一と蘭と志保と園子と呼んだ

「…どうしたの？里香ちゃん。」

と蘭、里香は涙を拭っている

驚く園子

「ちょっと、里香ちゃん？」

「…あの、工藤君、蘭さん、園子さん、志保さん、今まで有難うございました。」

私、行きたい大学に受かって、もうココにはご厄介になれないことが分かりまして…。」

短い期間でしたけど有難うございました。ご恩は忘れません。」

深々と頭を下げる里香

「…もう会えないの？…やだよっ、嫌だよそんなの。私もっと里香

ちゃんと友達になりたかった！

でも…、そうだよね、里香ちゃんだって大学行くよね。夢をかなえに行くんだもん。

私、離れても里香ちゃんのことずっと応援してるから！！

また…ね？」

蘭は里香に抱きつきながら、言った

里香はいつもなら汚らわしいといって手をはたいていたがもう違う

蘭に抱きついた

そして園子にも、仕舞いには志保と新一にも。

新一は微妙に赤面してた

里香が旅立つ日、皆は工藤邸の前で里香を見送ることにした

トランクを持ち、里香は深々とお辞儀をした

「今までお世話になりました。また会えたら会いましょう。さよなら。」

里香はそういってトランクを持ち、去っていった…

新一らはその後姿を見えなくなるまで見つめていた…

## Story 40 (後書き)

無理やり完結してごめんなさい。

有難うございました！

あと、まだ恋人同士になつてなかつたので番外編として恋人になるのもせたいと思います。

本編は終わりです。次は番外編のため更新は不定期になります。がヨロです。

平成23年4/19 桜実保乃佳



## Another Story(前書き)

一応、番外編という意味で。スペルや意味が間違ってたらご指摘お願いします。

## Another Story

日は逆る…

あれは里香の小屋に来た日。

小屋で1晩泊まることになっていた

平次と和葉、里香、園子そして志保は5人で少しカードゲーム。

蘭と新一はベランダで夜空に輝く満天の星を2人で眺めていた

「…あつ、新一、見てよ、流れ星。」

蘭は夜空を指差して言った

新一は手すりに頬杖をつきながら「ああ」と頷く

蘭は新一を少し睨む

「私、いつも思ってるけど、新一って本当にロマンってものがないわよねえ。」

腕を組み、いう

「ほっとけ、俺はどうせロマンなんつーもんはねえよ。」

少し拗ねる新一  
その顔を見て少し微笑む蘭

「かーわいいっ!」

少し膨れた新一の頬をつんと指先で突つつく蘭

「…っ、やめろ!バー口っ／／／」

蘭の手を握り、離させる新一

蘭は少し赤面

「ちよっ、し、新一い…／／手っ!手っ!」

ブンブンと新一の手を振り回す

新一は我に返ったのか慌てて蘭の手を離す

「ねえ、新一、1つ聞きたいことが前々からあったの。」

蘭が笑顔で聞く

新一は聞き返す

「この前、音楽室でいきなり私にキスしたのってどうしてなの?」

少し赤面して聞く蘭

新一も顔が赤くなる

「…いついやつ、それはっ…そのっ、なんっーか…な。」

一気に赤面し、顔をぽりぽりとかく

蘭は新一の顔を覗き込む

「新一、顔が赤いよ、顔が真っ赤だよ？本当に可愛いんだからっ  
」

クスと笑う蘭

新一は「バーロっ！なんじゃねーよ」と可愛いということ認め  
たくないらしい

「どっしてっ？どっしてどっしてっ？」

子どもみたいだ。

可愛いのか息を呑む新一

「…もう言っちゃまっていい？理由。<sup>ワケ</sup>」

蘭は小さく息を呑んでから頷く

「…ワケってのは。」

新一は少しの間蘭を見つめると、蘭の顎を持ち上げて…

キスをした

蘭は思い切り赤面

そして少しの間、この時間が続く

そうしてそつと唇を離す

「…ワケはこういうコト。蘭、オメーが好きだ。

19歳になったら俺と結婚してくれ。」

蘭は口を手で覆う

新一は真剣な顔

「…私でいいの？他にもいい女の人いっぱいいるよ。」

と蘭

「オメーしかいねえよ。だから俺と真剣に…」

蘭はその言葉を聴くと…

「うん！私、新一と一緒に歩いてくー！！何があっても絶対に歩いてくー！！」

と新一に抱きついた

新一は少し黙って赤面していたがそつと蘭を包み込むように抱きしめた

夜空には大量の流星群。

まるで2人を祝福するように…

そのとき…

「おめでとーっっ！！」

とベランダに園子と和葉、その他もろもろの人たちが来た  
新一と蘭は赤面どころではなかった…

「蘭、アンタ、将来絶対新一君と歩いてくんでしょ！？絶対に結婚  
式に招待しなさいよ！！」

蘭の手をとって言う園子

志保は新一の元へ

「…名探偵さん、よかつたわね、愛しの彼女と永遠に死ぬまで一緒  
に歩いていけるんだから。」

まあ、もうのろけ話を聞くのはゴメンだけどね。」

志保はお手上げの手をして新一に言った

鼻で笑う新一

平次もニヤニヤ…

「…あつ、そーだ、服部、オメーもさっさと決めちまえよ！和葉ちゃんど。」

新一が思い出したように言う  
すると平次は…

「…アホっ、何言ってるねん。俺らはもうとっくのどーに付き合ってるんやからな！」

工藤らと同じように将来の誓いしてなあ。せやから結婚式に呼んだるで！」

と笑顔で和葉に抱きついた

和葉は思い切り赤面し、ふざけたように平次の頬を軽く叩いた

里香はその姿を見て笑ってた

そして新一と蘭の元へ行き

「…あの、今までお2人の仲を引き裂こうとして申し訳ありませんでした！」

もしもよろしければ…結婚式に私を招待してくれませんか？」

里香が頼むと新一と蘭は顔を見合わせて頷いた

里香も満面の笑みを浮かべた…



Another Story (後書き)

完結です！

有難うございました！

ではでは

平成23年4/25 桜実保乃佳

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6017q/>

---

School Story

2011年9月22日22時37分発行